

要旨

有瀬、西峯集落の空間的特質

- 1つの山地地形に並存する2つの集落の空間構成分析を通して -

社会システム工学コース

1255061 小井土実

本研究の目的は有瀬、西峯集落の空間的特質を明らかにすることである。空間的特質とは自然条件である立地地形、人為的要素である街路、水路、居住地、信仰地、農地などの配列や、その構成からわかる総合的な特質のことをさす。対象領域における空間的特質としては、1つの山地地形に並存する2つの集落が持つ空間の個別性と共有性に焦点を当てることとする。また、対象とする空間は現在の棚田集落としての空間が形成された明治以降、車通行が発達する高度経済成長期以前の空間とする。

有瀬、西峯集落は高知県中部を流れる物部川流域圏中流部右岸にある棚田集落である。2集落は「タコウノヤマ」と呼ばれる山の斜面地に隣接して位置しており、東西と南を河川に囲まれている。2集落は1つの山地に位置しながら、固有の氏神を信仰しているなど、それぞれが異なる歴史、信仰を持っている。一方、両者に共通することは棚田集落であること、集落が山腹、山麓で分かれていること、棚田集落において重要な空間である水路を1部共有していること、さらに、タコウノヤマを信仰する山の神が、各集落にあることなど、多くの共通点や共有性がある。このように、2集落は1つの山地に並存し、個別の空間を持ちながらも共有の空間をあわせ持っていることが特徴である。

本研究で空間的特質を明らかにする手順として、まず2集落の空間要素を把握するために、自然条件である立地地形の特性、人為的空間である街路、水路等の集落内分布を把握する。次に空間分布の特性にもとづいた空間構成図を書き記し、最終的には空間構成図から読み解ける空間的特質を示す。これらの手順は農村計画分野における空間研究の普遍的な調査手法である。ただし、同一山地に立地する二つの集落の固別性と共有性に焦点を当てる、本研究の視点は独自のものである。

現在、物部川流域圏上中流部の中山間地域は過疎化の進行が激しいが、有瀬、西峯の2集落は各々が独自性を有しつつも、場所に根差して並存して生きていくありようがみられる。このような空間のありかたを明らかにしていくことは、現代の多様性を認めながら共同で生きていくこと、「コロナ」以降の過密居住に対して離散的に住まいながら、つながりを持つ生き方への知見が得られるものと思われる。

Abstract

Considerations on the spatial quality of Arase and Nishinomine -Through the analysis of spatial composition of two villages located in one mountain slope area-

Infrastructure Systems Engineering Course
1255061 Koido Minoru

The purpose of this study is to clarify the spatial characteristics of the Arise and Nishimine settlements. Spatial characteristics refer to the overall characteristics that can be understood from the arrangement and composition of natural conditions (topography), human factors (roads, waterways, residential areas, religious sites, and agricultural lands), and other factors. The spatial characteristics of the target area will focus on the individuality and commonality of the spaces of two villages coexisting side by side on a single mountainous terrain. The target spaces are those that existed after the Meiji period (1868-1912), when the present terraced rice field villages were formed, and before the period of high economic growth, when car traffic developed.

Arise and Nishimine are terraced rice field villages located on the right bank of the Monobe River, which flows through the central part of Kochi Prefecture, adjacent to a mountain slope called "Takounoyama" and surrounded by rivers to the east, west, and south. The two villages are located in one mountainous area, but each has a different history and beliefs, including a unique clan deity. On the other hand, the two villages share many similarities and commonalities, such as the fact that they are both terraced rice paddy villages, that they are separated by mountainsides and foothills, that they share one waterway, which is an important space in terraced rice paddy villages, and that each village has a mountain deity who worships Takounoyama. Thus, the two villages coexist in one mountainous area and are characterized by having both individual spaces and shared spaces.

In order to clarify the spatial characteristics of the two settlements, the first step in this study is to understand the spatial elements of the two settlements by first understanding the characteristics of the topography, which is a natural condition, and the distribution of human-made spaces such as streets and waterways within the settlements. Next, a spatial configuration map is drawn based on the characteristics of the spatial distribution, and finally, spatial characteristics that can be deciphered from the spatial configuration map are presented. These procedures are universal research methods for spatial studies in the field of rural planning. However, the perspective of this study, which focuses on the solidarity and commonality of two villages located in the same mountainous area, is unique.

Currently, depopulation is progressing rapidly in the mountainous areas in the upper and

middle reaches of the Monobe River watershed area, but the two villages of Arise and Nishimine, while each having their own identity, seem to be living side by side with each other, rooted in their places. By clarifying the nature of these spaces, we can gain insight into how to live together while acknowledging diversity in the modern age, and how to live in harmony while living apart from each other in contrast to the overcrowding that has occurred since the "corona" period.

目次	
要旨	1
目次	4
序章	8
0-1 研究の背景	9
0-2 研究の目的	10
0-3 既往の研究	11
0-4 研究の方法	12
0-5 研究の構成	13
第1章 集落の概要	14
1-1 集落の定義	15
1-2 集落空間の概念	15
1-3 集落空間の要素	17
1-4 集落における自然条件と人為的空間	18
第2章 有瀬、西峯集落の概要	21
2-1 有瀬集落の概要	22
2-2 西峯集落の概要	23
第3章 有瀬、西峯集落の空間と空間構成	24
3-1 集落の枠を超えた共有空間と空間構成	26
3-2 有瀬集落の空間と空間構成	30
3-3 西峯集落の空間と空間構成	55
第4章 有瀬、西峯集落の空間的特質	71
4-1 有瀬と西峯集落の空間的特質-集落空間の概念図を構成する要素に焦点を当てて	73
4-2 有瀬、西峯集落の総合的な空間的特質-集落の固有性と、共有の意味	84
終章	90
5-1 研究の成果	91
5-2 研究の課題	91
謝辞	92
参考文献	93

図目次

第1章

図 1-1	研究の視点の概念	15
図 1-2	本研究における集落空間の概念図	15
図 1-3	集落空間の要素	16
図 1-4	水郷集落の水田	17
図 1-5	木曾川河口の輪中集落	18
図 1-6	鳥取砂丘の集落	19

第2章

図 2-1	有瀬集落概要	21
図 2-2	西峯集落概要	22

第3章

図 3-1	三宝神社の配置	26
図 3-2	三宝神社の空間構成	27
図 3-3	オサバイ様の配置	28
図 3-4	オサバイ様の空間構成	29
図 3-5	立地地形(有瀬)	30
図 3-6	立地地形の空間構成(有瀬)	31
図 3-7	水系の分布(有瀬)	32
図 3-8	水系の平面空間構成(有瀬)	33
図 3-9	水系の断面空間構成(有瀬)	33
図 3-10	街路の分布(有瀬)	34
図 3-11	街路の空間構成(有瀬)	35
図 3-12	農地の分布(有瀬)	36
図 3-13	本田井期の農地分布	37
図 3-14	新田井期の農地分布	37
図 3-15	新井期の農地分布	37
図 3-16	農地の空間構成(有瀬)	38
図 3-17	居住地の分布(有瀬)	39
図 3-18	居住地の空間構成(有瀬)	40
図 3-19	奥有瀬山祇神社の配置	41
図 3-20	奥有瀬山祇神社の空間構成	42
図 3-21	山の神の配置(有瀬)	43
図 3-22	山の神の空間構成(有瀬)	44
図 3-23	とどろ様の配置	45
図 3-24	とどろ様の空間構成	46

図 3-25	神母神社の配置	47
図 3-26	神母神社の空間構成	48
図 3-27	共同墓地の配置	49
図 3-28	共同墓地の空間構成	50
図 3-29	観音堂の配置	51
図 3-30	観音堂の空間構成	52
図 3-31	先祖八幡の分布	53
図 3-32	先祖八幡の空間構成	54
図 3-33	立地地形(西峯)	55
図 3-34	立地地形の空間構成(西峯)	56
図 3-35	水系の分布(西峯)	57
図 3-36	水系の平面空間構成(西峯)	58
図 3-37	水系の断面空間構成(西峯)	59
図 3-38	街路の分布(西峯)	60
図 3-39	街路の空間構成(西峯)	60
図 3-40	農地の分布(西峯)	61
図 3-41	農地の空間構成(西峯)	62
図 3-42	居住地の分布(西峯)	63
図 3-43	居住地の空間構成(西峯)	64
図 3-44	金峯神社の配置	65
図 3-45	山の神の配置(西峯)	66
図 3-46	金毘羅の配置	67
図 3-47	八幡宮、地藏堂の配置	68
図 3-48	信仰地の空間特性(西峯)	69
図 3-49	日ノ御子の子祠	69

第4章

図 4-1	集落空間の要素	72
図 4-2	集落空間の概念	72
図 4-3	街路の空間構成(有瀬)	73
図 4-4	水系の平面空間構成(有瀬)	73
図 4-5	水系の断面空間構成(有瀬)	73
図 4-6	立地地形の空間的特質(西峯)	74
図 4-7	水系の平面空間構成(西峯)	74
図 4-8	水系の断面空間構成(西峯)	74
図 4-9	生業の空間構成(有瀬)	76
図 4-10	生業の空間構成(西峯)	77

図 4-11	居住地の空間構成(有瀬)	78
図 4-12	居住地の空間構成(西峯)	79
図 4-13	三宝神社の空間構成	80
図 4-14	オサバイ様の空間構成	80
図 4-15	先祖八幡の空間構成	81
図 4-16	共同墓地の空間構成	81
図 4-17	信仰空間の空間構成(西峯)	82
図 4-18	空間概念図 (有瀬集落)	84
図 4-19	空間概念図 (西峯集落)	86
図 4-20	空間概念図 (オサバイ様)	88
図 4-21	空間概念図 (三宝神社)	88
図 4-22	空間概念図 (有瀬、西峯集落)	89

序章

0-1 研究の背景

有瀬、西峯は高知県中部を流れる物部川流域圏中流部右岸にある棚田集落である。2集落は「タコウノヤマ」と呼ばれる山の斜面地に隣接して位置しており、東は河ノ内川、西は有瀬川、南は物部川と3方を川に囲まれている。2集落は1つの山地に位置しながら、固有の氏神を信仰しているなど、集落は異なる歴史、信仰を持っている。

有瀬は山腹の奥有瀬、山麓の下有瀬からなる。有瀬川から本田井、新田井、新井の3つの水路を集落内に通し、農閑期には山の木を伐り出し、木馬道から下有瀬まで下ろして、有瀬川の下流で船に積んで運んでいた。

西峯は山腹の西峯、山麓の河口からなる。山腹、山麓という上下に集落があることは有瀬と類似しているが、水路はタコウノヤマにある沢から取水する奈路井と、有瀬の新井を共有している。また西峯氏という氏族の歴史的な盛衰に深く関わりを持つ場所を信仰しているなど、有瀬とは異なる歴史、信仰を持っていることがわかる。

両者に共通することは棚田集落であり、集落内が山腹、山麓で分かれていることがある。また棚田集落において重要な空間である水路について、西峯は有瀬の新井を共有しているなど、有瀬とは水系の共有がある。またタコウノヤマに対しては山の神として各集落で信仰する場があるほか、三宝神社という作付けの神を祀る神社を共に信仰しているなど、信仰地の共有もある。2集落は1つの山地という場所に位置し、個別の空間を持ちながらも共有の空間をあわせ持っていることが特徴である。

現在、物部川流域圏上中流部の中山間地域は過疎化の進行が激しく、有瀬、西峯は今も棚田を利用しているが、田を管理する人も減少している。一方で西峯では、田の肥料のために、春には菜の花を植え、それが「天空の菜の花畑」として魅力的な空間を作り出していることや、有瀬には新たな移住者がみられるといった新たな現象もある。こういった現象を前提にするならば、過疎域として衰退するのみではない発展の可能性が見出せるのではないか。また有瀬、西峯にみられる、各々が独自性を共有しつつも、自然や場所に寄り添って共に生きていくありかたは、現代社会において新たに参照すべき知見を与えてくれるものと思われる。具体的には、個々における多様性を認めながら共同で生きていくことへの知見、「コロナ」以降の都市域過密居住に対して自然豊かな場所での離散的な生き方への知見などである。これらの知見を得るためには、有瀬、西峯の空間的特質を把握することが必須だと考える。ここでいう空間的特質とは、自然条件である立地地形、人為的空間である街路、水路、農地、居住地、信仰地の配列や、その構成からわかる総合的な特質をさす。なお、本研究は物部川流域圏において1つの山地地形に位置する集落で行う空間研究であり、研究手法は建築計画学の農村計画分野における普遍的な空間調査にもとづくことから、本研究と同じ物部川流域圏の集落研究や、似た条件を持つ場所での研究と比較すること、そして、それら集落で同様の手法で研究をすることなどの展開が望める。

0-2 研究の目的

本研究は有瀬、西峯の空間的特質を明らかにすることを目的としている。ここでいう空間的特質とは、自然条件である立地地形、人為的空間である街路、水系、農地、居住地、信仰地の配列や、その構成からわかる総合的な特質のことを指す。対象領域における空間的特質としては、1つの山地地形に並存する2つの集落が持つ共有空間、個別空間のありように焦点をあてることとする。また、対象とする空間は現在の棚田集落としての空間が形成された明治以降、車通行が発達する高度経済成長期以前とする。

空間的特質を明らかにする手順として、まず2集落の空間要素を把握するために、建築計画学における農村計画分野の調査研究として普遍的な調査手法を採用する。具体的には集落空間の要素、概念を定義して、集落空間の要素における集落内分布を把握する。次に空間分布の特性にもとづいて空間構成図を書き記し、最終的に空間構成図から空間概念図を作成し、そこから空間的特質を読み解く。

0-3 既往の研究

集落と立地地形に関する書籍として、矢嶋仁吉の「集落地理学」がある。この本は集落地理学の入門書として集落研究に関する基礎的知識を述べたものであり、「集落は各地の風土の相違や社会的環境の違い等を反映し、それぞれの土地に応じて、もっとも住みよい形態を以って成立しているのである。」と述べている。

集落の空間研究は各地で行われており、そのなかでも集落の空間を地形と集落の構成要素の関係から明らかにする試みはよく見られる。齊木崇人氏による「集落空間の構成原理と地形立地」では、茨城県の農村集落を対象にして集落の地形的立地条件の類型化をし、居住域、信仰地、土地利用など物的空間構成要素を網羅的に把握してその関係性を明らかにすることで、集落空間の構成原理を考察している。集落の構成要素を把握し、地形との関係性を明らかにするという視点は本研究とも共通している。また、特定の1集落の空間研究についての事例は、枚挙に暇がない。本研究も特定集落を対象としているが、同一山地地形に隣接して立地する2集落の固有性と共有性に焦点を当てており、その意味で独自性を有している。

本研究の対象領域は物部川流域圏中流部にある2集落である。同じ物部川流域圏での研究は、若林寛和の「物部川流域圏中流部における農家の屋敷構えの空間特性」、楠本建の「物部川流域圏上中流部における集落と神社の空間的特質」がある。両者とも、本研究の対象領域を含めた空間研究だが、両者は流域圏という集落を超えた領域を対象としており、かつ集落にある特定の要素に限定したものである。

対象領域において同一山地に隣接して立地する2つの集落を対象としていること、2つの集落のそれぞれの空間的特質を明示して比較考察したうえで、集落空間の固別性と共有性に着目して2集落全体の空間的特質を明らかにすること、これは本研究の独自性である。

0-4 研究の方法

本研究では、対象集落の空間的特質を明らかにするにあたって、

1. 文献調査、2. 空間調査、3. ヒアリング調査の三種の手法に基づき分析を行う。調査結果は GIS（地理情報システム）で統合した。また、対象とする空間は車通行が発達する高度経済成長期以前、明治以降とする。

1. 文献調査

文献調査では、集落そのものの概要については、矢嶋仁吉の「集落地理学」にもとづいて位置付けた。対象領域については「日本歴史地名体系」を主に、「香北町史」等を用いて集落概要と歴史を把握した。

2. 空間調査

空間調査では地図調査と現地調査を行った。

地図調査では、明治40年の地図（ $s=1/50000$ ）から農地などの土地利用の把握、地理院地図（1961）から居住地の位置の把握を行った。

現地調査では、ゼンリン住宅地図（2018）を主に、集落の立地地形、主要な水系、街路、各集落の住居の配置と母屋の向き、信仰地の配置と向きを記録した。また、現在の水系、街路は改良や林道の新設など対象とする時代の空間からは大きく変容しているので、水系、街路は主要なもののみ記録した。

3. ヒアリング調査

空間調査、文献調査で把握しきれない内容についてヒアリング調査を実施した。具体的には生業の変化、居住地のありようや信仰地の歴史的背景について聞き取りをおこなった。

4. GIS 統合

本研究では GIS（地理情報システム）を活用しながら研究を進めた。調査対象となる地物の位置情報や属性情報を与えることで、田の GIS データと照らし合わせながら空間解析をすることができるほか、見やすい分布図の作成や、属性ごとの対象物の検索・表示などに有効である。また、調査内容を GIS データとして保存、管理することで今後の研究における素材として役立つと思われる。

0-5 研究の構成

序章では、研究の背景、研究の目的、既往の研究、研究の構成、研究の方法について書き記す。

第1章では対象集落の地形種別とそこに立地する集落空間の概要をまとめ、本研究における空間要素と空間概念の定義づけを行う。

第2章では有瀬、西峯集落の地理的概要、歴史的概要について明らかにする。

第3章では有瀬、西峯の集落空間の自然条件、人為的空間について地図と空間調査にもとづき、その空間分布を把握する。

空間分布について、自然条件は地形の谷、尾根形状と谷尾根線の方位について把握すること、人為的空間については主たる街路、水系とその他の農地、居住地、信仰地の分布を把握する。

その後、空間分布から、集落空間の要素を記号化、抽象化することで、空間構成を図解と共に明示する

第4章では3章で明らかになった空間分布、空間構成から、有瀬、西峯の空間的特質を1章で定義した生業空間、居住空間、信仰空間について個別性と共有性に着目して空間概念として明示し、それらを踏まえて有瀬、西峯の空間的特質を述べる。

終章では、本研究の成果、課題を示す。

1章 集落の概要

1-1 集落の定義

集落とは、各地の風土の相違や社会的環境の違い等を反映し、それぞれの土地に応じて、もっとも住みよい形態を以って成立している人間の居住の様態のことである。つまり集落においては自然地理的な要素に対して、いかなる関係をもって人間が集住するかが問われる。なお、集落は人口の規模の大小、居住様式、機能によって「村落」と「都市」に大別される。さらに村落は自然条件やおもな産業から「農村・林村・漁村」に分けられる。本研究で対象とする2集落は共に「村落」の「農村」に位置付けられる。

1-2 集落空間の要素

集落研究の既往研究として、齊木崇人「集落空間の構成原理と地形立地」では、空間の要素を推計、土地、道路網、共有施設、余裕地、住居の6項目を構成要素として取り上げていた。本研究はこれを踏まえ、集落空間の要素を以下のようにする。

- ・集落空間は、その集落が立地している自然条件と、その上につくられる人為的空間からなるものとする。
- ・自然条件は立地地形、人為的空間は骨格となる街路、水系のほか、農地、居住地、信仰地がある、それらを重ねることで生業空間、居住空間、信仰空間と大別する。
- ・要素の重なり合いとして、自然条件の立地地形、人為的空間の骨格である街路、水系の上に農地があると生業空間、居住地があると居住空間、信仰地があると信仰空間とする。

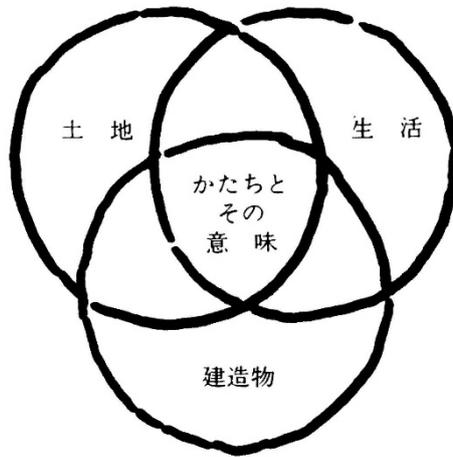


図 1-1 研究の視点の概念
 (齊木崇人「集落空間の構成原理と地形立地」より引用)

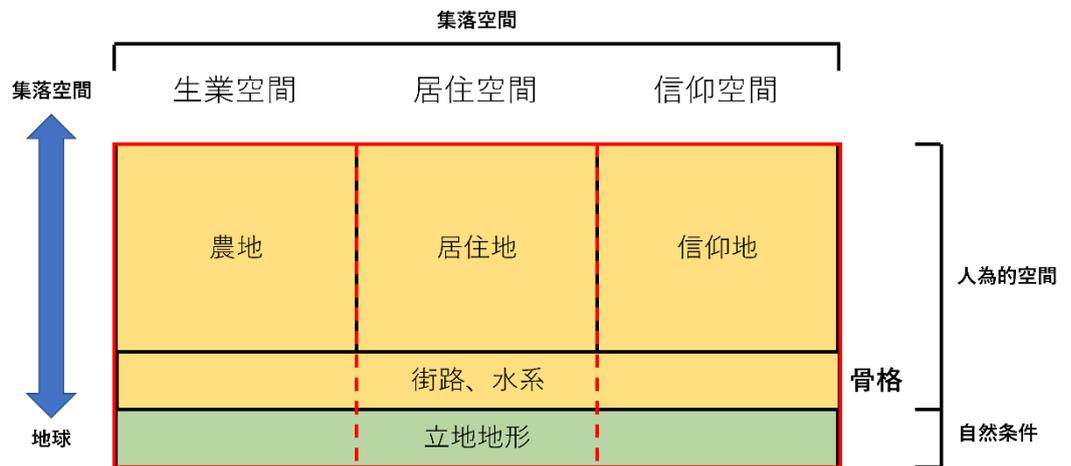


図 1-2 本研究における集落空間の概念図

1-3 集落空間の概念

「村落」において、集落形態や自然条件から民家の集まり方により「集村」と「散村」に大別できる。しかし集落形態や立地条件は細分化され、対象によってさらに類型化されるなど、対象とする村落の型についてひとまとまりに概念化することは難しい。

齋木の論文では、研究視点を概念化し、集落形成要素を「土地」、「生活」、「建造物」の3つに大別して図式化している。本研究では集落空間の概念における図を齋木のカテゴリを参照し、以下のようにする。

・集落空間は生業空間、居住空間、信仰空間が内在しており、それぞれが相互に有機的な関係性をもっている。

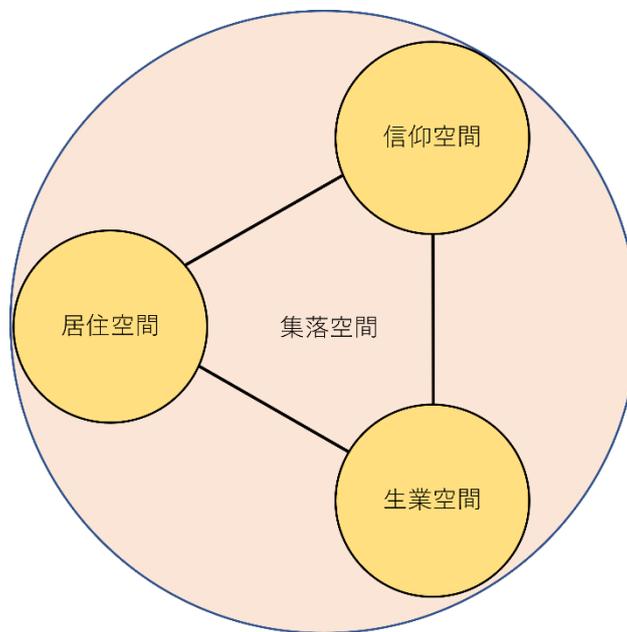


図 1-3 集落空間の概念

1-4 集落における自然条件と人為的空間

「村落」は、自然条件によって、農業、漁業などの生業が決まり、人為的空間は、自然条件がもたらす恩恵と不適の解消を含めて設置される。ここでは本論で扱う農村からいくつかの事例をしめす。

「水郷」の農村として、河川のほか、湖畔群を有しており、低平な地形は水田として利用されているものがある。低地の大部分は砂州であり、増水期には氾濫の害を受けることがあるので、宅地は土を高く盛り上げているありようがみられる。

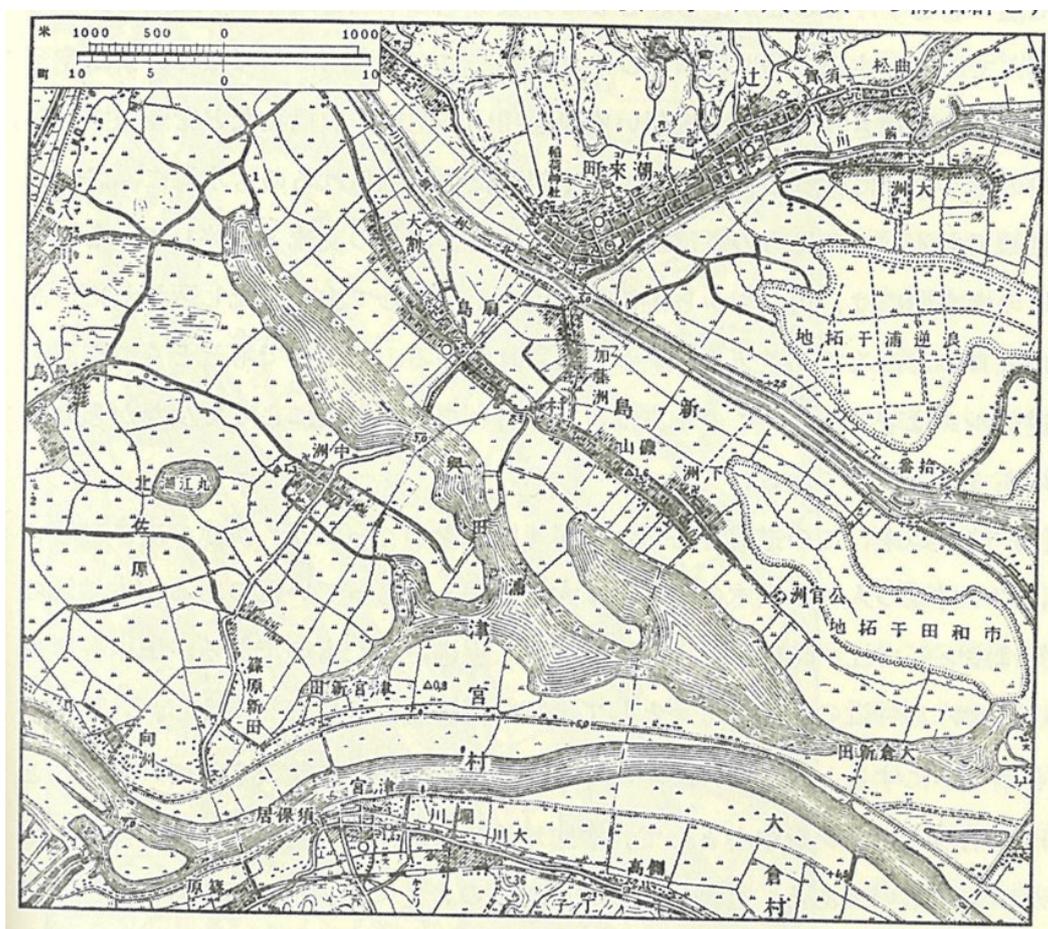


図 1-4 水郷集落の水田
(矢嶋仁吉「集落地理学」より引用)

「輪中集落」と呼ばれている集落は三角州の周りを河川や堤防によって囲まれた島上の低地にあり、そこに発達する集落をさす。この集落は河川が集まる場所であることから、周囲に輪のような堤防を築いて「輪中」を形成している。

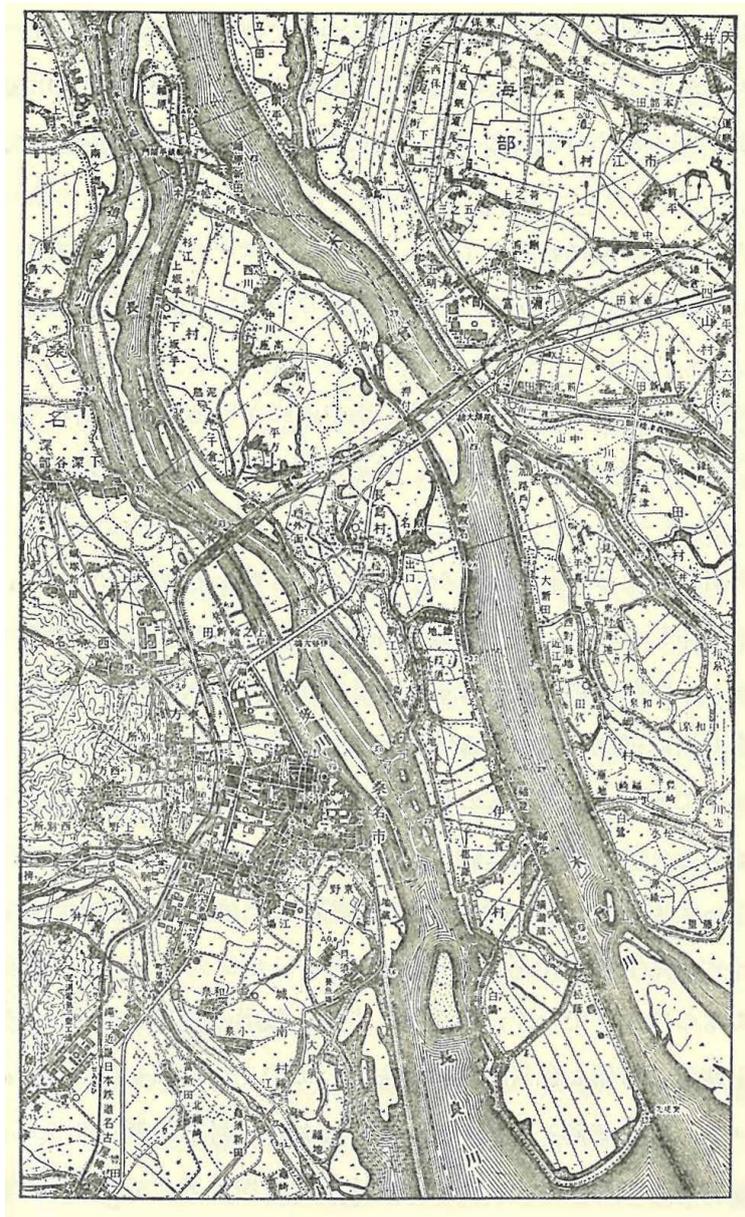


図 1-5 木曾川河口の輪中集落
(矢嶋仁吉「集落地理学」より引用)

砂丘がある農村として、鳥取砂丘では海岸線上に防風林であるクロマツなどが植えられるほか、砂丘地帯が波浪のような地形を成しており、その内側を利用して耕地を営むことで村落が形成されている。

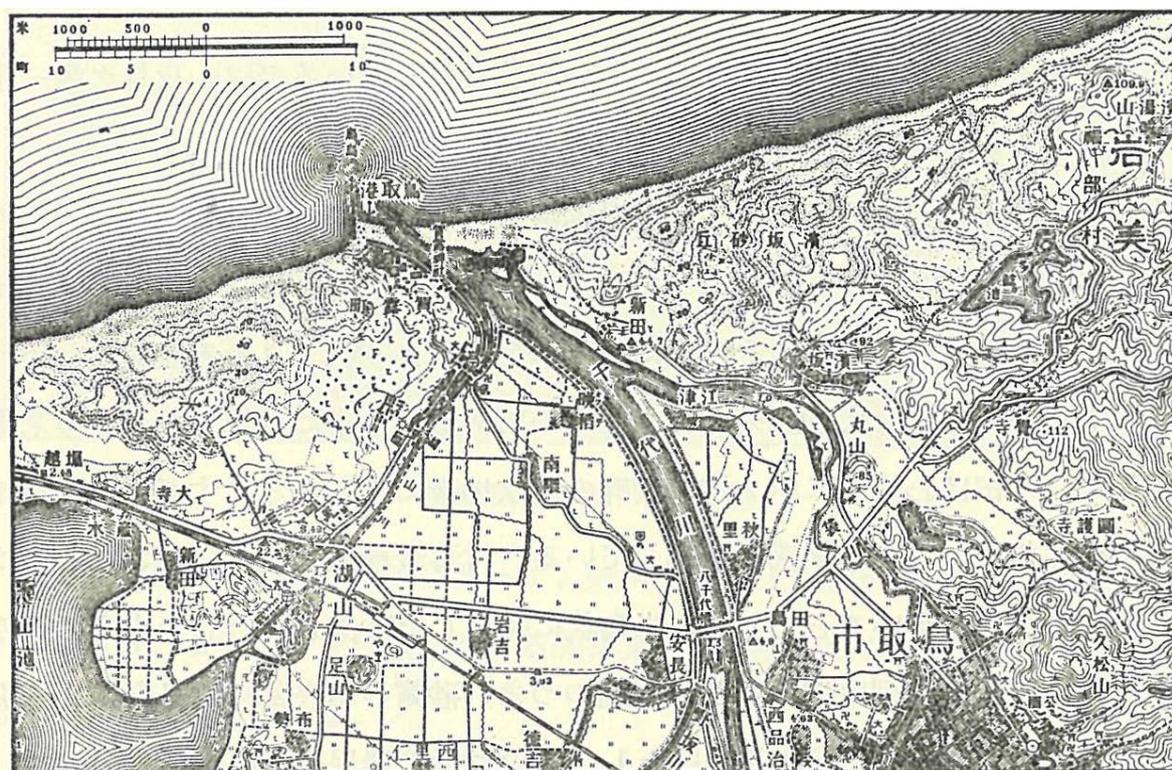


図 1-6 鳥取砂丘の集落
(矢嶋仁吉「集落地理学」より引用)

これらの事例から、自然条件は集落の生業を決めるだけでなく、生業を行う際に不適な条件である場合、それを解消するよう人為的空間を定めることで集落を成立させている。

2章 有瀬、西峯集落の概要

2-1 有瀬集落の概要

・地理的概要

五百蔵村の東、物部川の北岸に位置し、東は西嶺村（西峯集落）。河岸段丘上の下有瀬と物部川支流有瀬川の東岸斜面の奥有瀬からなる。タコウノヤマと呼ばれる山頂が見え、信仰の対象となっている。

・歴史的概要

生業は農業であり、葦生谷地検帳（1588）によると、耕地はすべて「有瀬名 彦大夫扣」とあり、有瀬氏は武士の一族であるといわれている。下有瀬の耕地は上田、中田など熟田の比率が高かった。また有瀬川の河口はかつて物部川を下る荷船の船着き場で、有瀬、有川など産物の集荷場となっていた。

利水については、元禄年間(1688-1704)に野中井という水路を新設している。

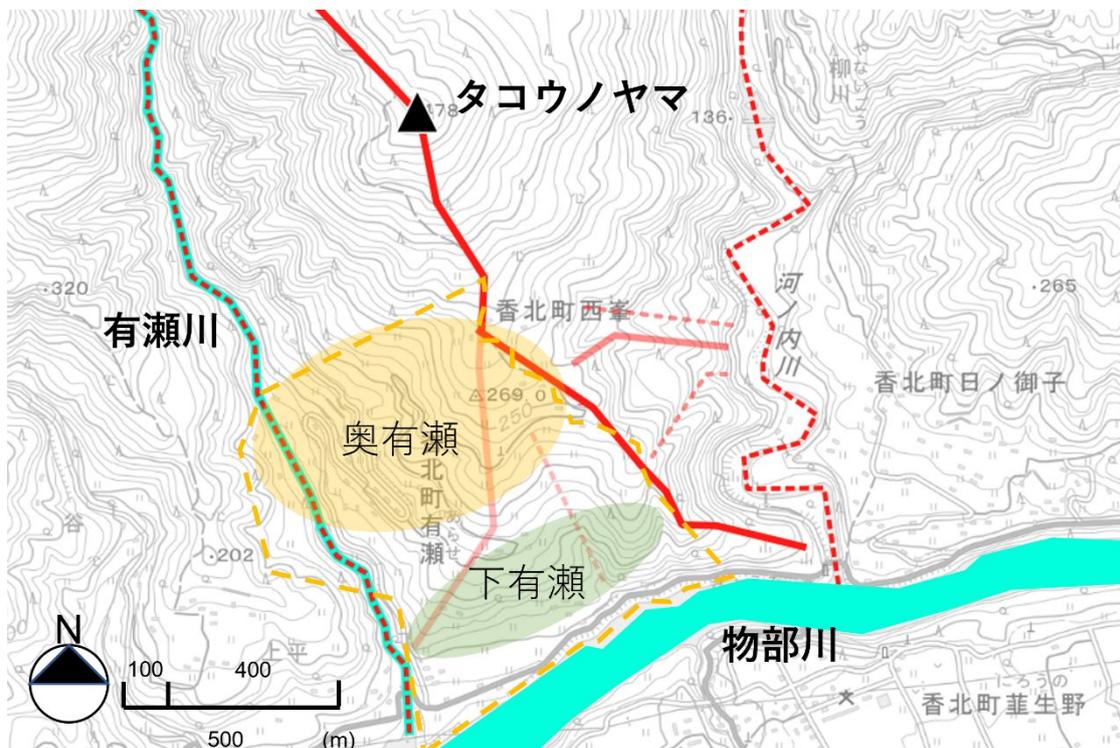


図 2-1 有瀬集落概要

凡例

- 尾根線
- - - 谷線
- 河川
- - - 集落境界

2-2 西峯集落の概要

・地理的概要

荒瀬村(有瀬集落)の東、物部川北岸に位置し、東は河ノ内川を隔てて日御子村。標高 250-300mの緩傾斜地に家屋が散在する。棚田を生業としている山腹の西峯、商いをしている物部川沿いの山麓の河口からなる。タコウノヤマと呼ばれる山頂が見え、信仰の対象となっている。

・歴史的概要

戦国時代当地を本拠とした土豪西峯氏は、楠目城(現土佐山田町)の城主山田氏の有力家臣で、西峯氏の左近守西念は主君山田基道の娘をめとっていた。しかし山田氏の謀略により命を絶たれ、妻も村内の城に火を放ち、幼児と共に身を投じたと言われている。村内の八幡宮の傍らにある子祠は焼け残った遺物を祀っていると伝えられる。

生業は農業であり、葦生谷地検帳(1588)では耕地は全て「名本分 西嶺名 永野源兵衛扣」とある。西峯氏は没落して、近村の土豪永野氏の勢力下にはいていた。耕地は下々田が目立つなか、重い税を課されていた。

利水については、有瀬川の常駐から用水を引き、あるいは大峯池を築いて灌漑していた。1857年には大峯池が決壊しており、年貢米の減額が認められている。

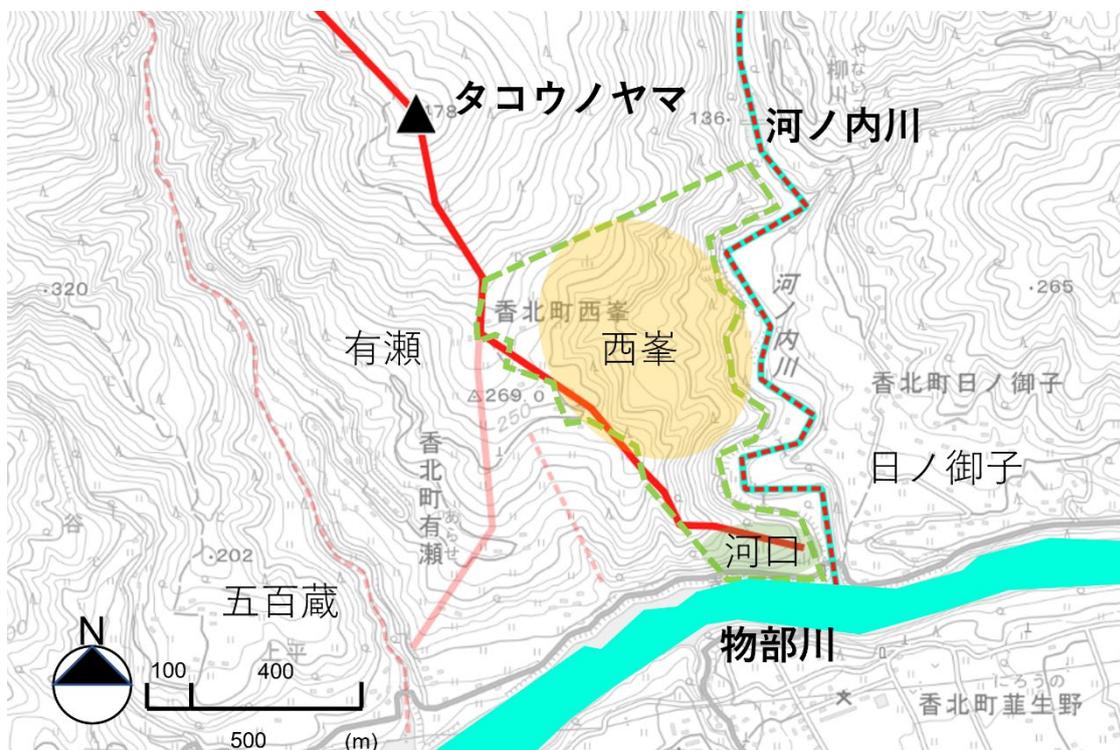


図 2-2 西峯集落概要

凡例

- 尾根線
- - - 谷線
- 河川
- - - 集落境界

3章 有瀬、西峯集落の空間と空間構成

3章 有瀬、西峯の空間と空間構成

本章では有瀬、西峯集落の空間として空間分布を把握すること、また空間分布から空間構成を明示する。

空間分布は1章で定義した集落空間の要素にもとづき、集落空間の要素である自然条件の立地地形、人為的空間の水系、街路、農地、居住地、信仰地について調査を行い、各要素について具体的なありようを分布として明示する。次に各要素の空間分布を抽象化することで、極端に具体的な空間のありようではない一定のまとまりを持った傾向としての特徴を明示する。明示の仕方は①集落の枠を超えた共有空間②有瀬の空間、③西峯の空間ごとに各要素を空間分布から空間構成として示す。集落空間の要素における具体的な調査対象は以下に記す。

自然条件

- ・立地地形：谷、尾根形状と谷線尾根線の方位を記録する。

空間形成要素

- ・水系：集落全体に関わる主要な川、水路を記録する。
 - ・道路網：集落全体にとって主要な道を記録する。
 - ・農地：範囲を記録する。
 - ・居住地：家屋の位置と母屋の方位を記録する。
 - ・信仰地：位置と方位、信仰対象と信仰者を記録する。
- ※方位は測定したものを16方位で分割したものを記録する。

3-1 集落の枠を超えた共有空間と空間構成

① 集落単位の枠を超えた共有空間

・三宝神社

三宝神社は有瀬、西峯、有川、古井の4集落を見渡せる位置であるタコウノヤマより北にある尾根上に置かれていた信仰地である。現在は有川、古井集落は住人がおらず、タコウノヤマから少し下った尾根線上に移っており、方位はタコウノヤマを向いている。このことから三宝神社は集落同士を束ね、かつ境界としての役割を持っており、状況により適切な位置に置かれる。

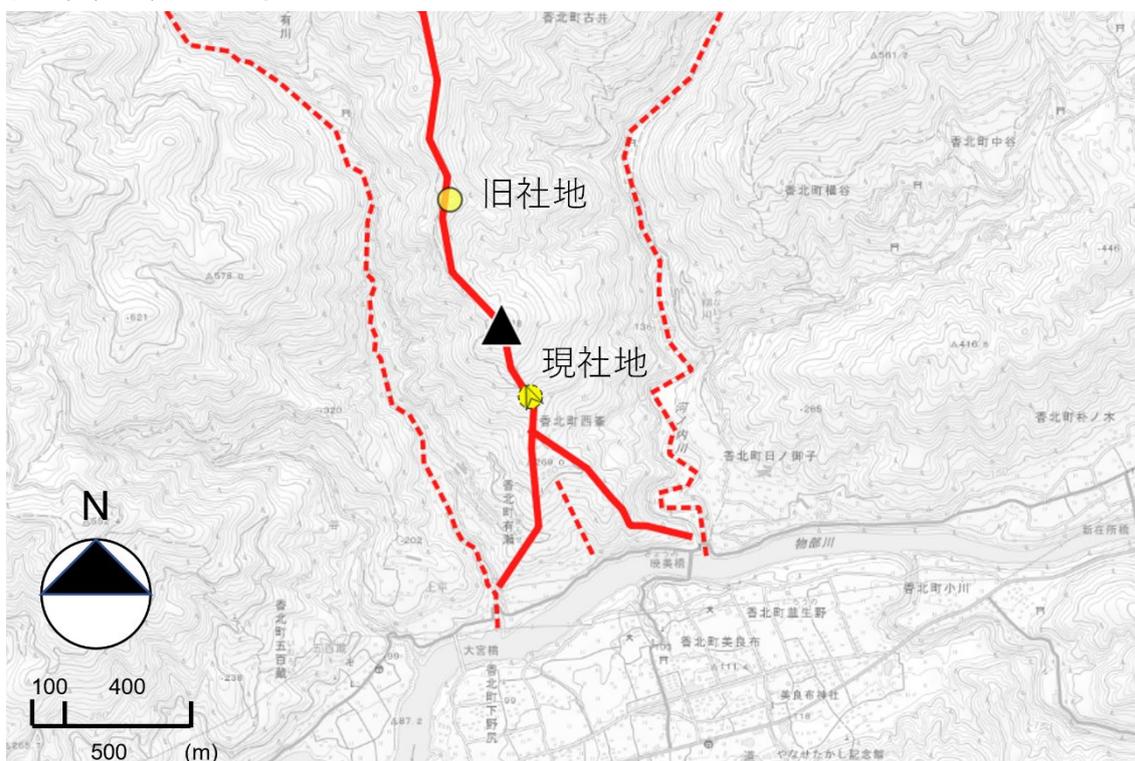


図 3-1 三宝神社の配置

凡例

- | | | | | | |
|---|--------|-----|-----|---|-----|
| ▲ | タコウノヤマ | --- | 谷線 | ● | 旧社地 |
| ▲ | 方位 | — | 尾根線 | ● | 現社地 |

・三宝神社の空間構成

三宝神社は4集落の共通の信仰かつ境界となる位置にその信仰地を置いていた。現代では有川、古井集落には人がおらず、信仰地が現存している有瀬、西峯側に降りてきたことから、状況に応じて変化する境界に合わせて場所が決まるといえる。

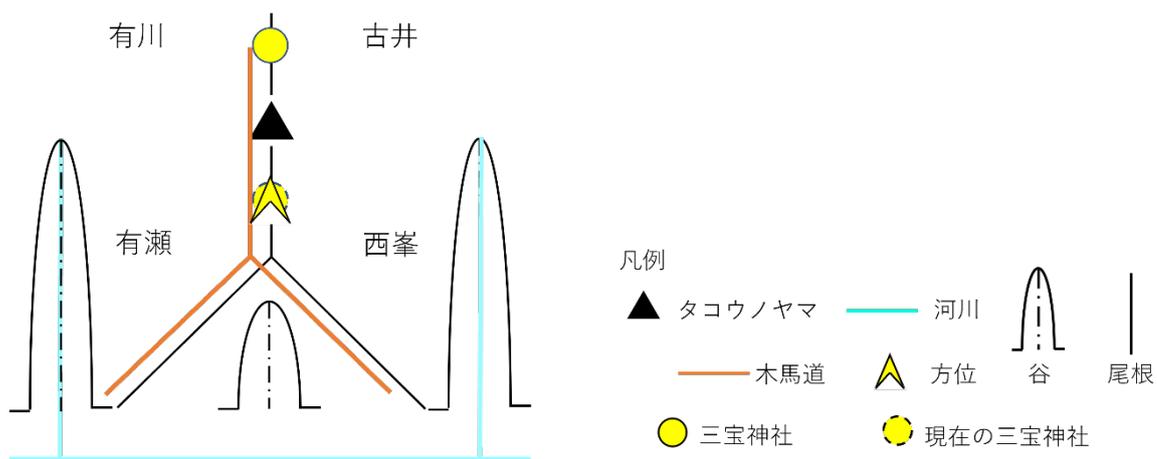


図 3-2 三宝神社の空間構成

・オサバイ様

オサバイ様は同じ井（水路）を利用して農業を行う人同士で作付け、収穫の際にお祭りをするという信仰がある。有瀬集落の本田井、新田井では特定の水路の場所で祭礼を行い、固定した信仰地はない。新井は有瀬、西峯両集落で利用している人がおり、信仰地を有瀬の木馬道かつ新井分岐点そばに置いている。

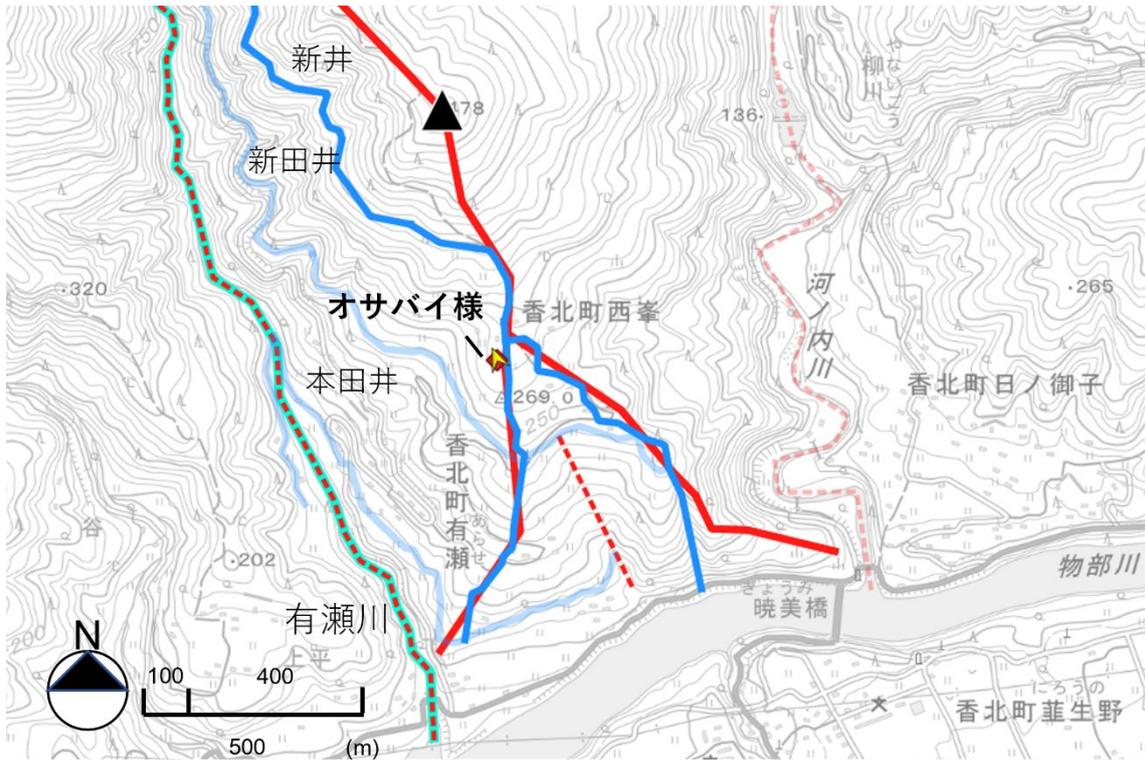


図 3-3 オサバイ様の配置

凡例

- ▲ タコウノヤマ
- 水路
- 河川
- - - 谷線
- 尾根線
- ▲ 方位
- オサバイ様

・オサバイ様の空間構成

オサバイ様は同じ水路を利用している者同士のコミュニティとしてあるが、集落が異なるもの同士で同じ水路を共有する際には水路を分岐している2つの尾根線の分岐点そばに信仰地を置くことで、分岐している場所が水を分けている場所かつ集落の境界でもあることをより強調している。

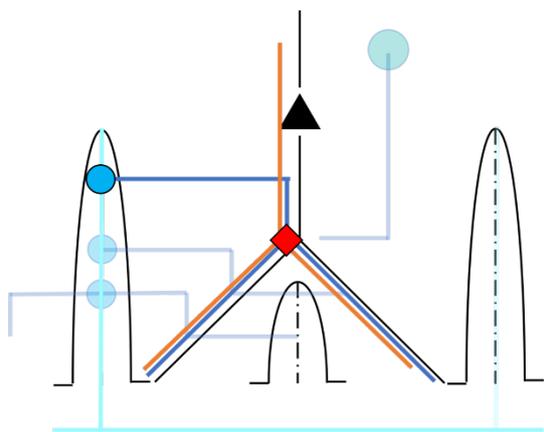


図 3-4 オサバイ様の空間構成

凡例

- | | | | | | | | |
|---|--------|---|-----|---|----|---|----|
| ▲ | タコウノヤマ | — | 水路 | — | 河川 | | |
| ● | 取水地 | — | 木馬道 | ▲ | 方位 | ⌒ | 谷 |
| ◆ | オサバイ様 | | | | | | 尾根 |

3-2 有瀬集落の空間と空間構成

○自然条件（有瀬集落）

集落西には南北に流れている有瀬川をもつ谷、タコウノヤマから南に下り、東西2手に分岐している尾根線の東側、南に東西に流れる物部川に囲まれている。集落内には2手に分岐した尾根のうち西側のものが奥有瀬、下有瀬の境界となっているほか、2本の尾根線に囲まれた谷が物部川まで伸びている。有瀬川の両岸の斜面地、尾根線に挟まれた地形の山腹が奥有瀬、尾根線に挟まれた地形の物部川沿い、河岸段丘が下有瀬となっている。

地形について、下有瀬がある河岸段丘と物部川は約20mもの高低差がある。尾根線の勾配は2本ともおおむね約20°である。集落そばの有瀬川は約5°の勾配を持ち、両岸にある農地から約20mの高低差がある。

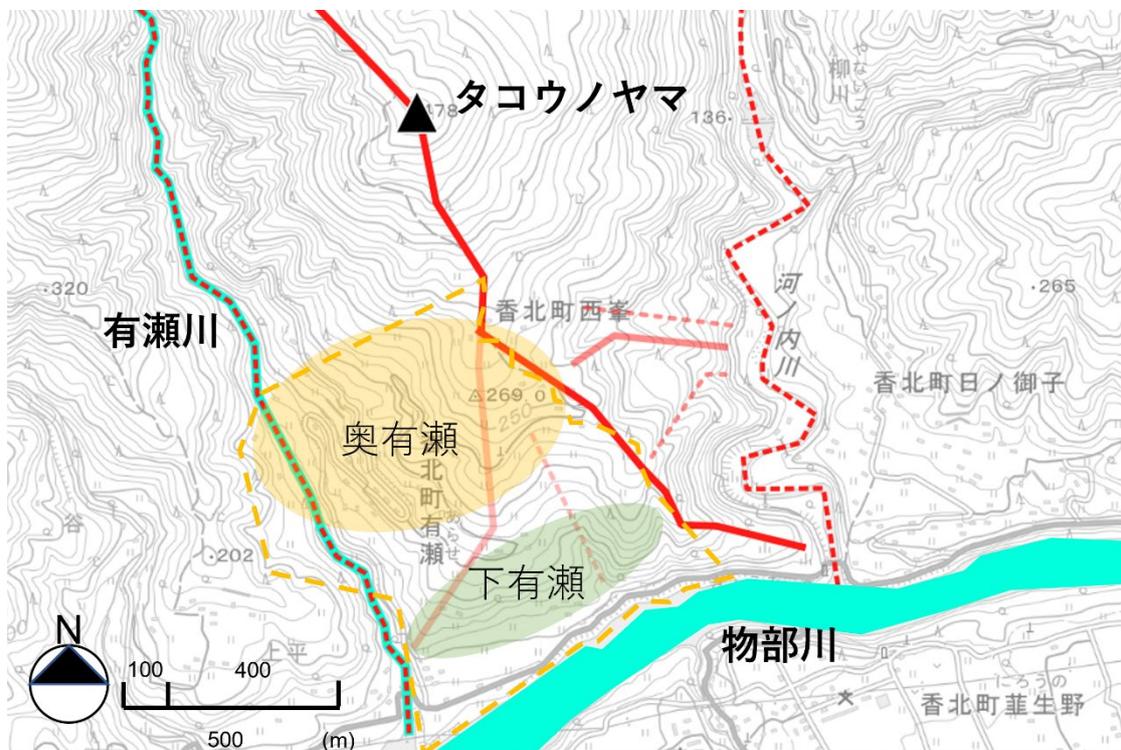


図 3-5 立地地形（有瀬）

凡例

- 尾根線
- - - 谷線
- 河川
- - - 集落境界

・立地地形の空間構成（有瀬集落）

有瀬は南北に流れる有瀬川を持つ谷、タコウノヤマから南に下り2手に分岐する尾根線の東側、南に東西に流れる物部川に囲まれており、2手に分岐する尾根の西側が山腹の奥有瀬、河岸段丘の下有瀬の境界となっている。

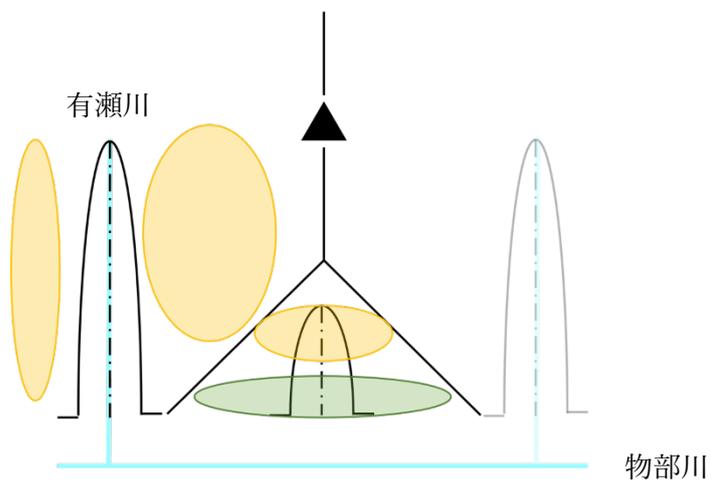
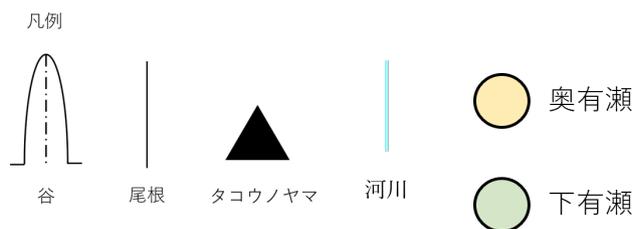


図 3-6 立地地形の空間構成（有瀬）



・水系の空間構成（有瀬集落）

有瀬は有瀬川から本田井、新田井、新井の3本の水路を引いており、本田井は等高線に沿って谷地形の奥有瀬から集落の西側尾根を通過して河岸段丘の下有瀬を通り、尾根に挟まれた谷で排水している。新田井、新井は共に西側尾根線を通り東側の尾根線近くの谷に排水している。また新井は2つに分岐する尾根線で水を分岐している。

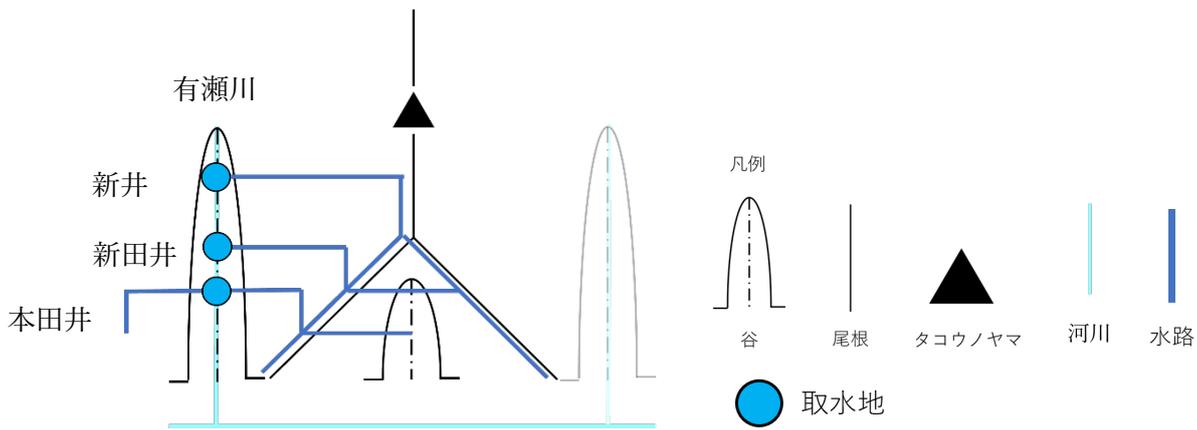


図 3-8 水系の平面空間構成（有瀬）

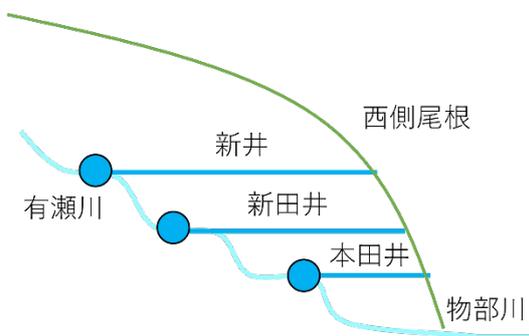


図 3-9 水系の断面空間構成（有瀬）

・街路（有瀬集落）

タコウノヤマから南に下り、東西2手に分岐している尾根の西側尾根線に山麓から山頂のタコウノヤマまで集落を縦断する幹線道路として木馬道がある。この道は谷沿いの奥有瀬、下有瀬の境界となるほか、農閑期には山から材木を切り出して、木馬道を利用して有瀬川の河口に運んでいる。



図 3-10 街路の分布（有瀬）

凡例

▲ タコウノヤマ

— 尾根線

- - 谷線

— 木馬道

・街路の空間構成（有瀬集落）

有瀬の街路は2手に分岐した西側尾根線を木馬道としている。この道は谷沿いの奥有瀬、下有瀬の境界でもあり、集落を縦断する幹線道路でもある。

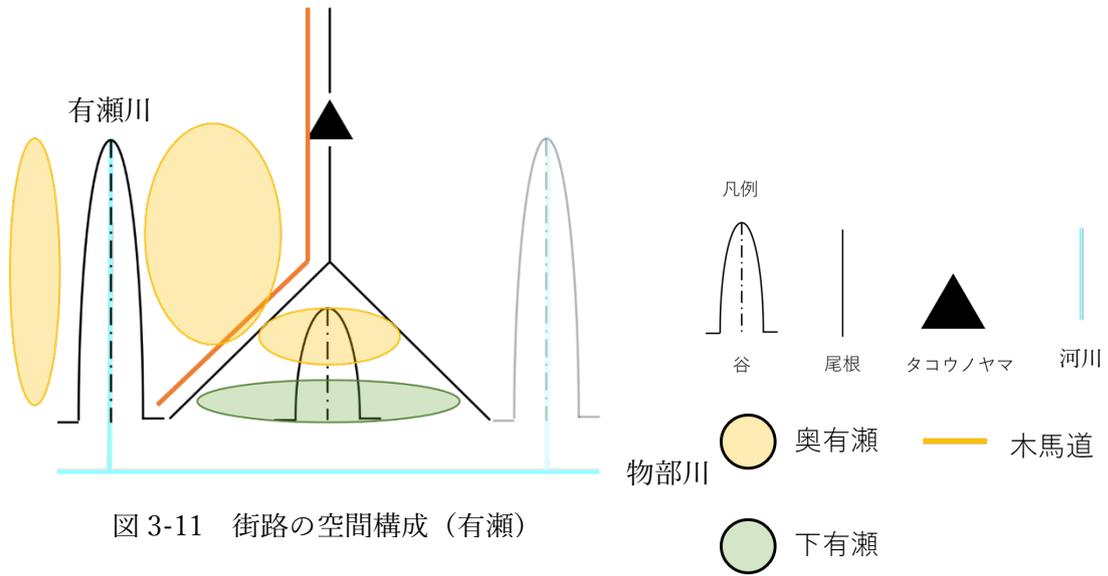


図 3-11 街路の空間構成（有瀬）

・農地（有瀬集落）

奥有瀬、下有瀬ともに農業を生業とした棚田を設けている。先述したように水路は低い順から本田井、新田井、新井の順に成立している。本田井による農地は奥有瀬の有瀬江川両岸の谷にあるほか、下有瀬では河岸段丘上のものである。新田井による農地は有瀬川向きの斜面地のほか、2つの尾根に挟まれた山腹にもある。新井による農地も有瀬川向きの斜面地、2つの尾根に挟まれた山腹にもあるほか、新井は西側の尾根線に沿って下っており、2つの尾根に挟まれた農地にも水を供給することができる。

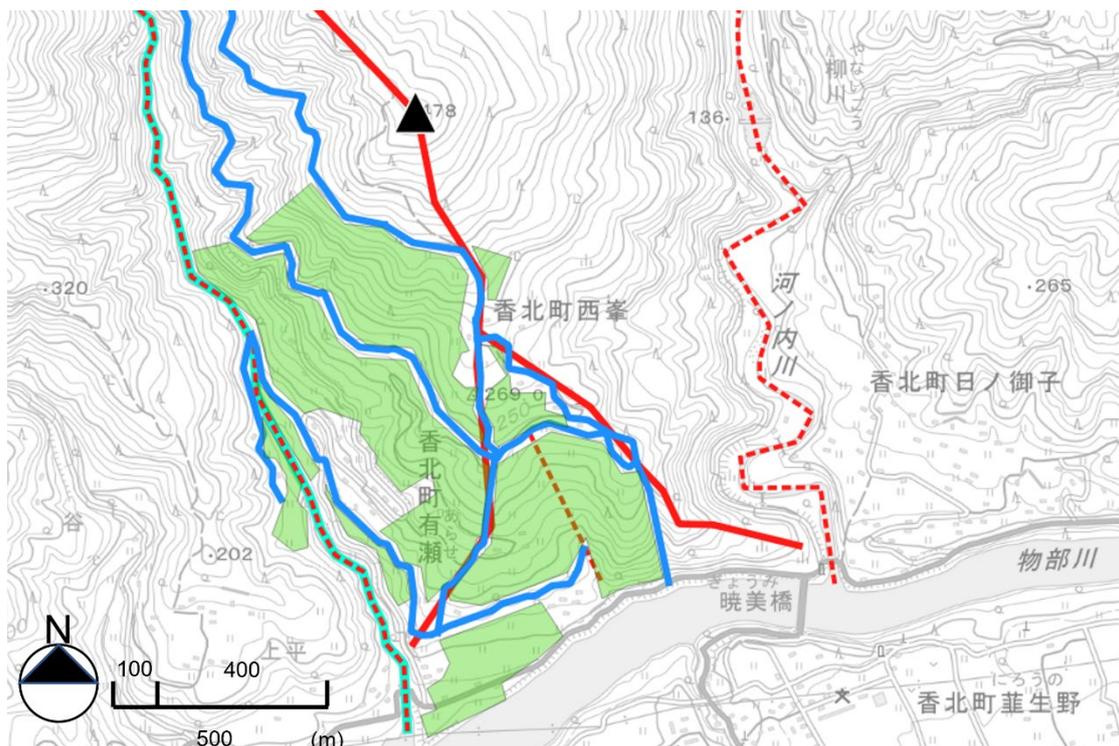


図 3-12 農地の分布（有瀬）

凡例

- ▲ タコウノヤマ
- 水路 — 尾根線 — 河川
- 農地 - - 谷線



図 3-13 本田井期の農地分布



図 3-14 新田井期の農地分布



図 3-15 新井期の農地分布

凡例

-  タコウノヤマ
-  水路
-  農地

・農地の空間構成（有瀬集落）

農地は水路より低い場所でしか成立しない。本田井の成立からさらに高い場所に新田井が成立したことで、2つの尾根線に挟まれた山腹にも棚田が成立し、新井が成立したことで尾根に沿って水が流れ、より潤沢な水の供給がなされている。

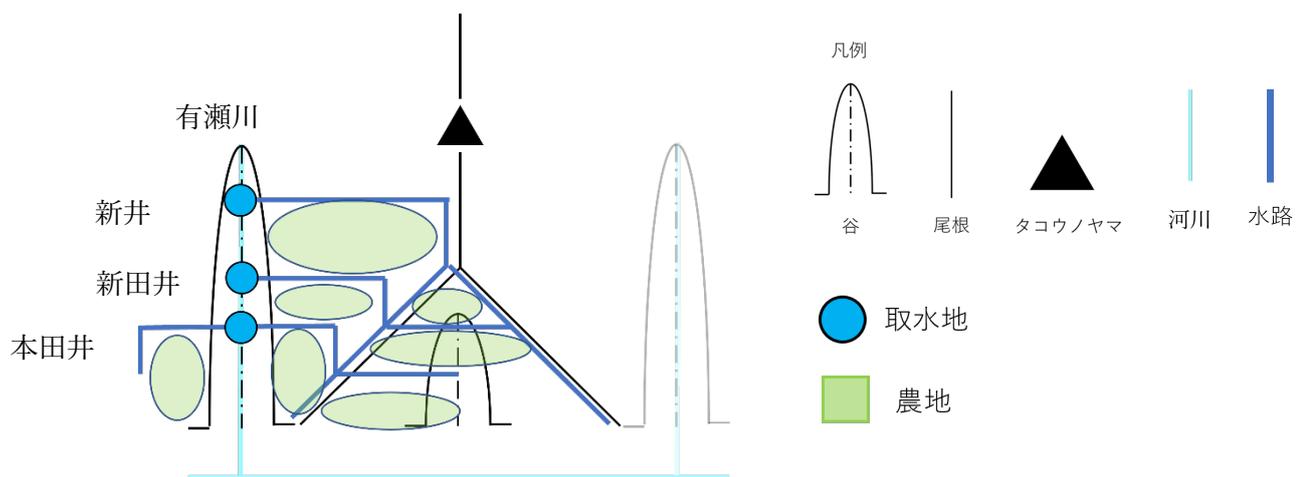


図 3-16 農地の空間構成（有瀬）

・居住地（有瀬集落）

有瀬川兩岸にある居住地の母屋は谷に向けて位置しており、これは谷に面している谷から標高約170m高い居住地の母屋も同じように谷を向いている。また奥有瀬の一部は、2つに分岐した尾根の東側尾根線、西峯集落との境界でもある西峯の木馬道に沿って置かれており、母屋の方向は地形に合わせて南側を向いており、西側尾根線である有瀬の木馬道中腹でも同様に南向きの居住地がみられる。下有瀬の居住地は3つのかたまりがみられ、木馬道に接しているもの、道に接しているもの、本田井の排水路付近にあるものがあった。母屋の向きは地形に合わせて南を向いている。

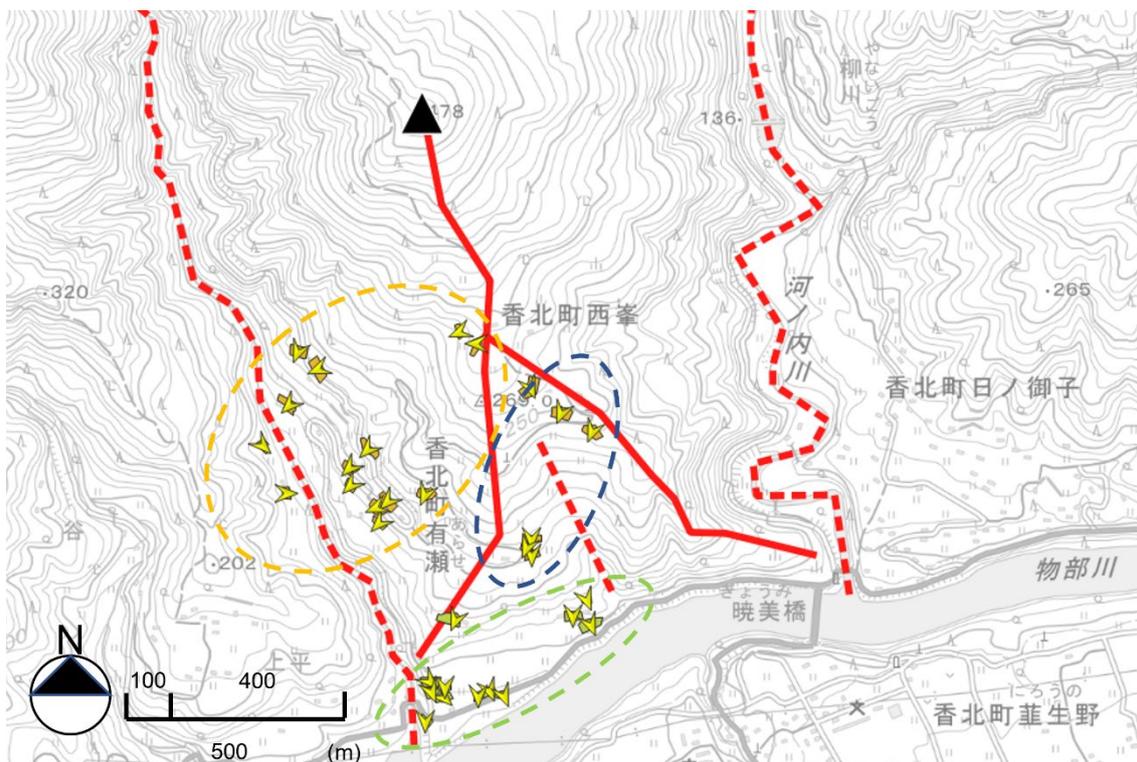


図 3-17 居住地の分布（有瀬）

凡例

- | | | |
|----------|----------|-------------|
| ▲ タコウノヤマ | ■ 奥有瀬居住地 | ○ 谷に面した居住地 |
| — 尾根線 | ■ 下有瀬居住地 | ○ 木馬道沿いの居住地 |
| - - 谷線 | | ○ 河岸段丘の居住地 |
| ▲ 方位 | | |

・居住地の空間構成（有瀬集落）

有瀬川両岸にある奥有瀬居住地の母屋は谷に向いて位置しており、谷に面している斜面地なら標高関係なく谷を向いている。一方奥有瀬で2つに分岐した木馬道そばの居住地をみると、地形に合わせて南を向いている。下有瀬の居住地も地形に合わせて南を向いているなど、有瀬川の谷地形で見られる現象は谷固有のものである。

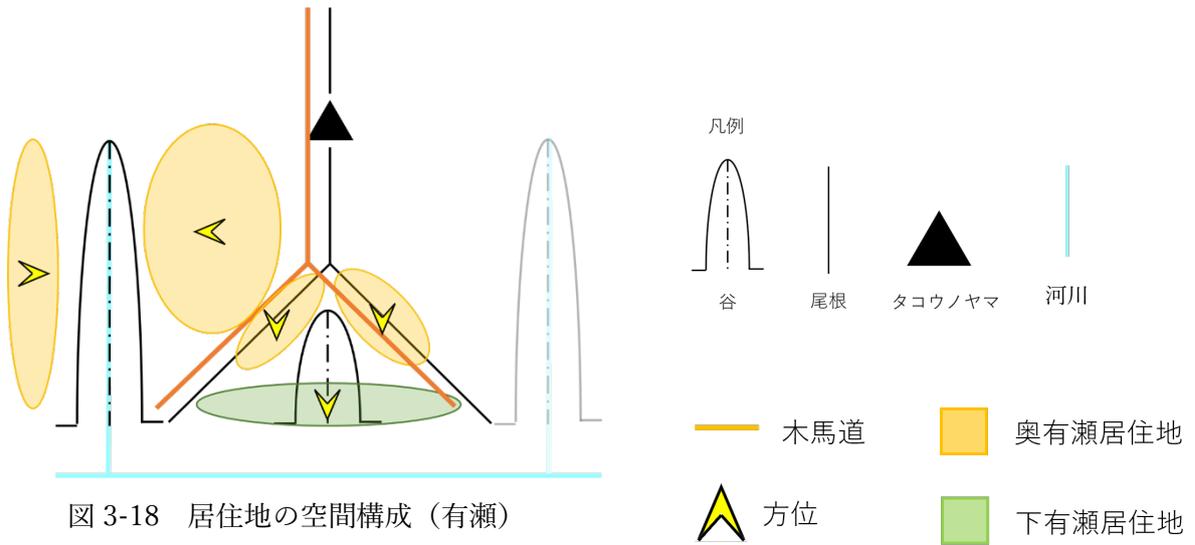


図 3-18 居住地の空間構成（有瀬）

- ・ 信仰地（有瀬集落）
- ・ 奥有瀬山祇神社（氏神）

氏神を祀る奥有瀬山祇神社は有瀬川左岸の本田井に比較的近い位置に置かれている。有瀬川は集落の基盤となる棚田に利水するための重要な空間であり、奥有瀬山祇神社も有瀬川が流れる谷側に位置している。本殿は斜面側にある御神体の巨石を向いている。また手前に水が流れるよう新田井からの水を引いている。

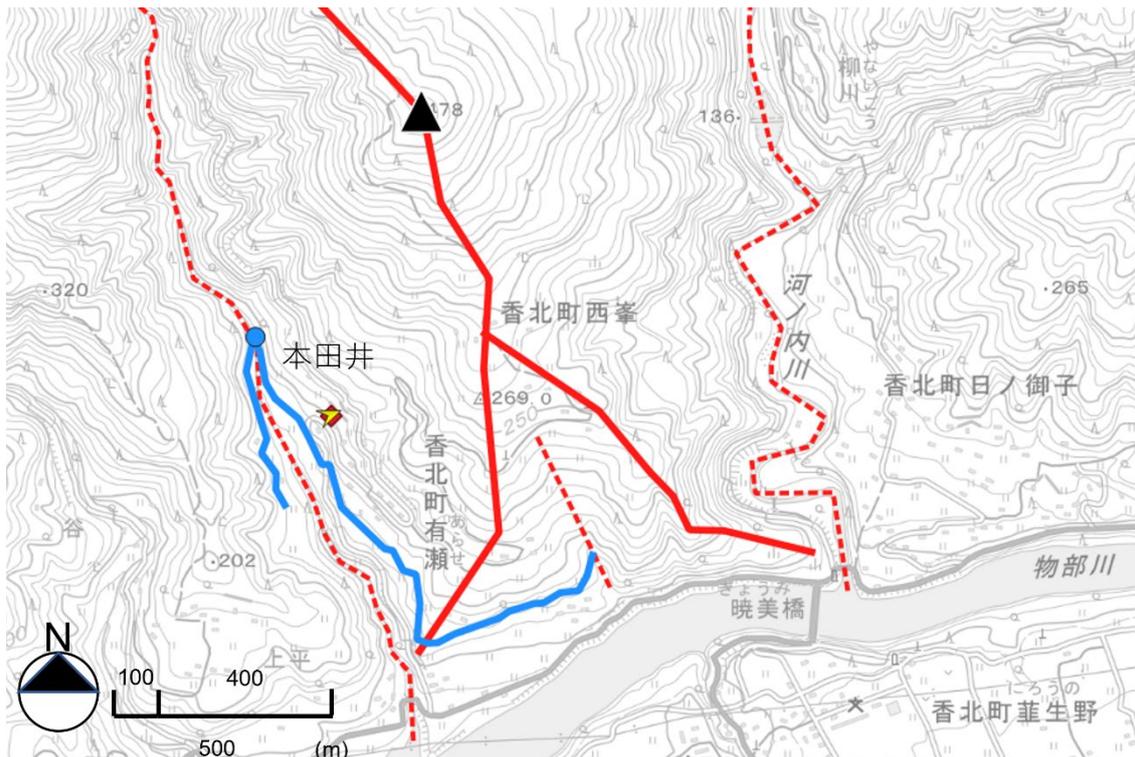


図 3-19 奥有瀬山祇神社の配置

凡例

-  タコウノヤマ
-  尾根線
-  谷線
-  方位
-  奥有瀬山祇神社

・奥有瀬山祇神社の空間構成

氏神を祀る奥有瀬山祇神社は谷を正面方向としており、本田井と新田井に挟まれている。

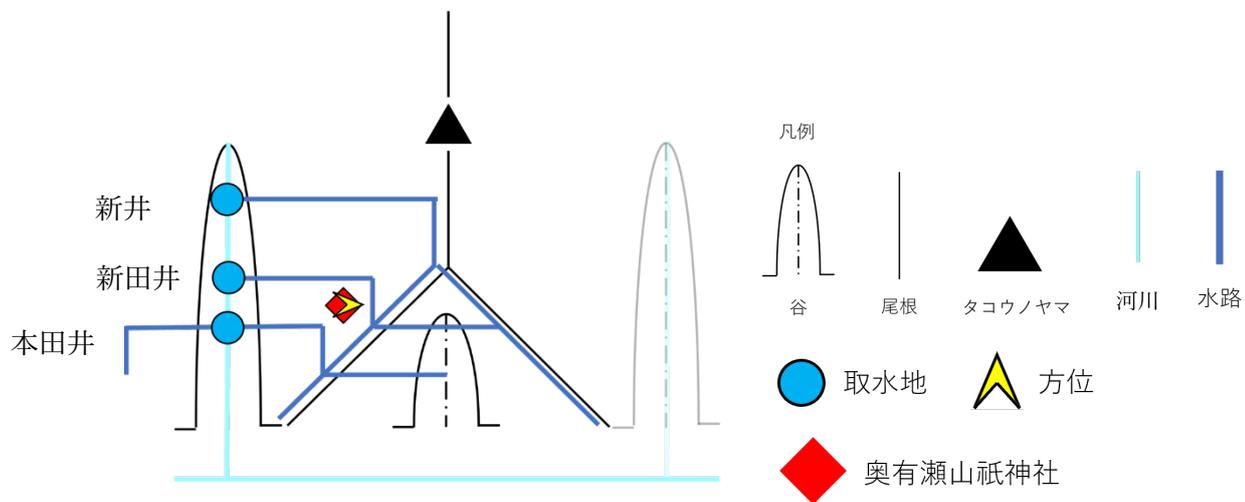


図 3-20 奥有瀬山祇神社の空間構成

・山の神

2手に分かれる尾根線の西側、有瀬の木馬道沿いかつ新田井から少し上ったところに山の神を祀る森があり、周囲は農地に囲まれている。山の神はタコウノヤマを祀っており、方位は北を向いてタコウノヤマが見える。

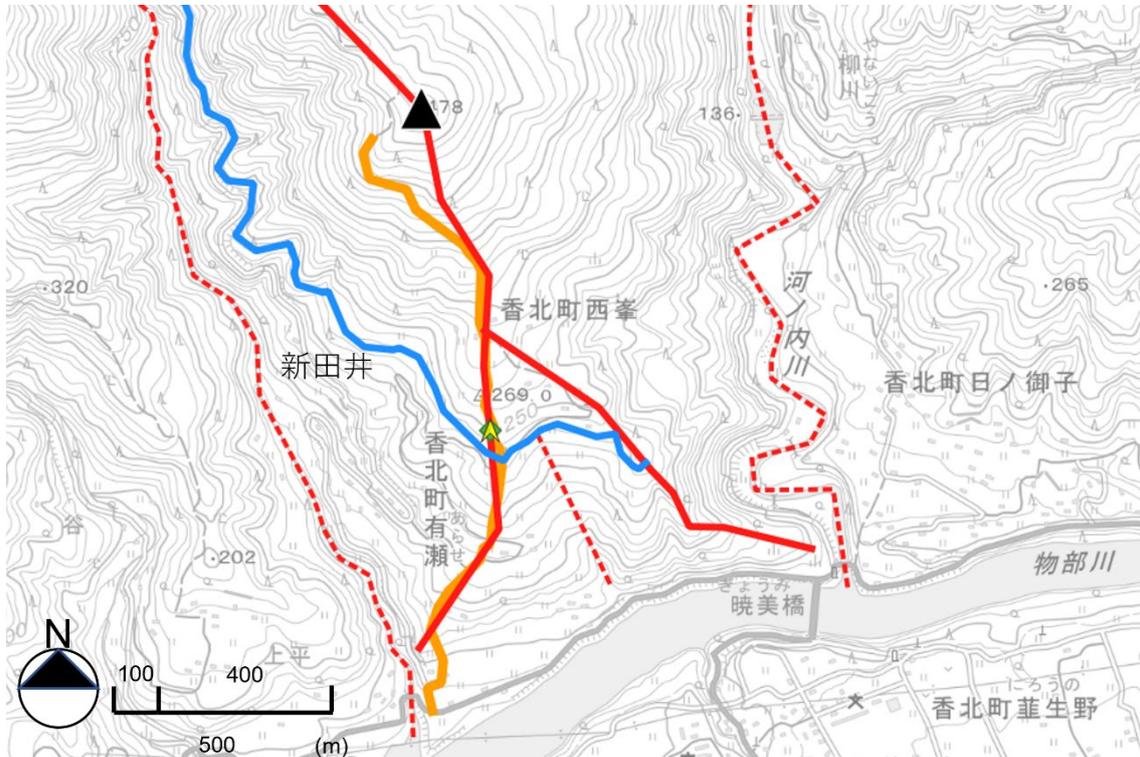


図 3-21 山の神の配置 (有瀬)

凡例

- ▲ タコウノヤマ
- ◆ 山の神
- 尾根線
- - 谷線
- ▲ 方位
- 水路
- 木馬道

・山の神の空間構成

2手に分かれる西側尾根線、有瀬の木馬道沿いかつ新田井から登ったところに位置しており、北のタコウノヤマに向いている。

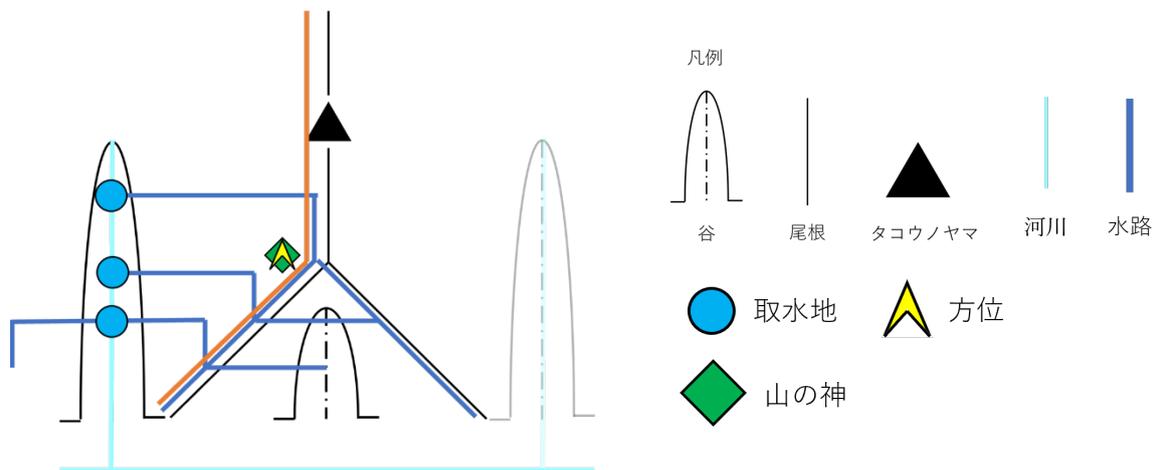


図 3-22 山の神の空間構成（有瀬）

・とどろ様

とどろ様は新田井の取水口に置かれており、有瀬川上流を向いている信仰地である。有瀬川から引いている3本の水路のうち取水地に信仰地を持つものは新田井のみである。新田井がもたらす農地の拡大や、有瀬集落全体で祀っていることなど、新田井による影響の大きさがうかがえる。



図 3-23 とどろ様の配置

凡例

▲ タコウノヤマ

▲ 方位

— 河川

● とどろ様

・とどろ様の空間構成

とどろ様は新田井の取水地に置かれており、有瀬川上流を向いている。有瀬川から引いている3本のうち取水地を信仰しているのは新田井のみ確認されている。新井により有瀬の山腹に水が渡り農地に大きく転用できていることや集落全体の信仰であることから、集落の生業を維持するための重要な水路を信仰していることがわかる。

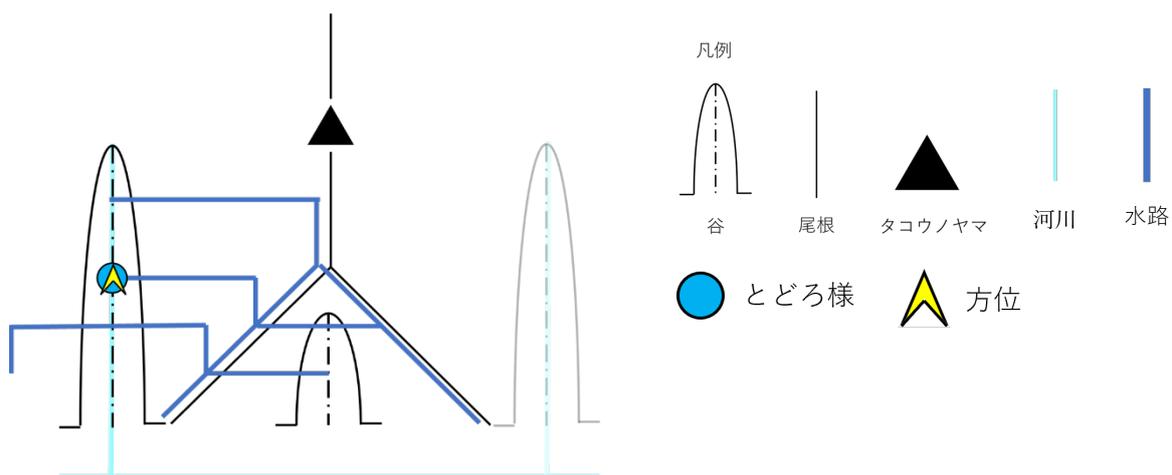
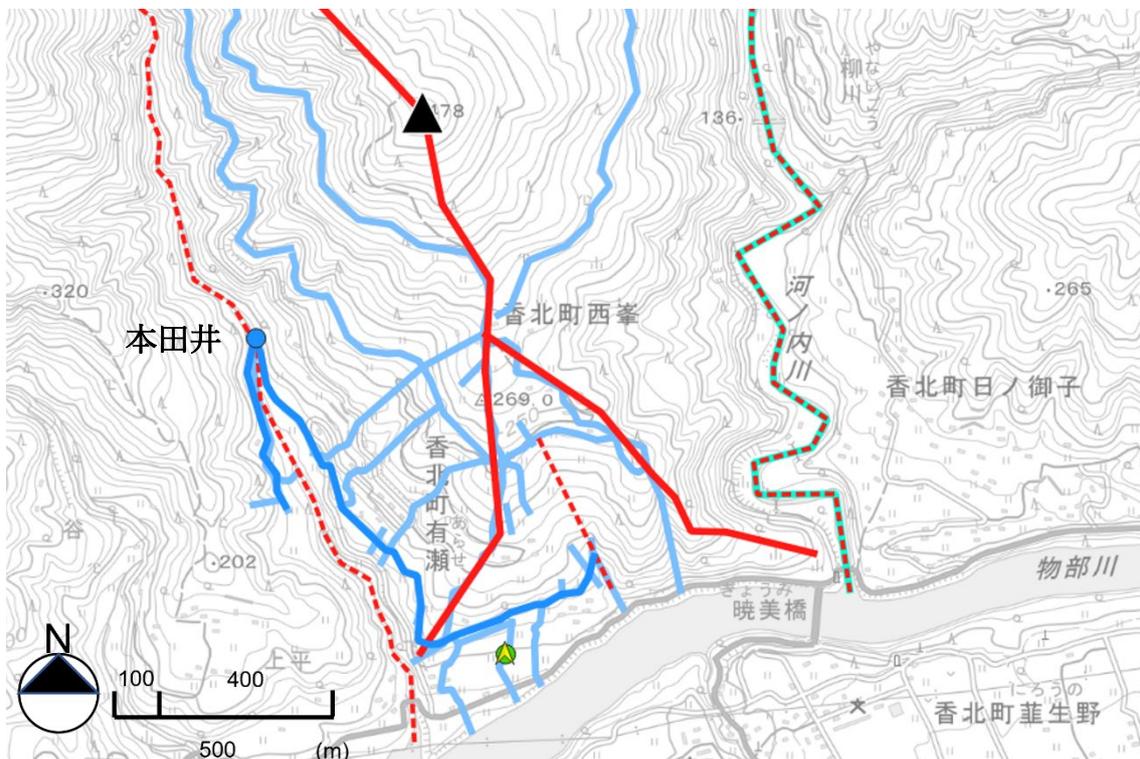


図 3-24 とどろ様の空間構成

・ 神母神社

神母神社は下有瀬の本田井近くに位置し、神社手前には本田井から水が横断するよう水路が引かれている。



凡例

図 3-25 神母神社の配置

- | | |
|----------|--------|
| ▲ タコウノヤマ | ● 神母神社 |
| — 尾根線 | ▲ 方位 |
| - - 谷線 | — 水路 |

・ 神母神社の空間構成

神母神社は下有瀬の中間に置かれており、奥有瀬山祇神社と同じく神社の前に水路を引いている。これは有瀬の核となる要素である水路を活用することで聖地の空間をより強めている。

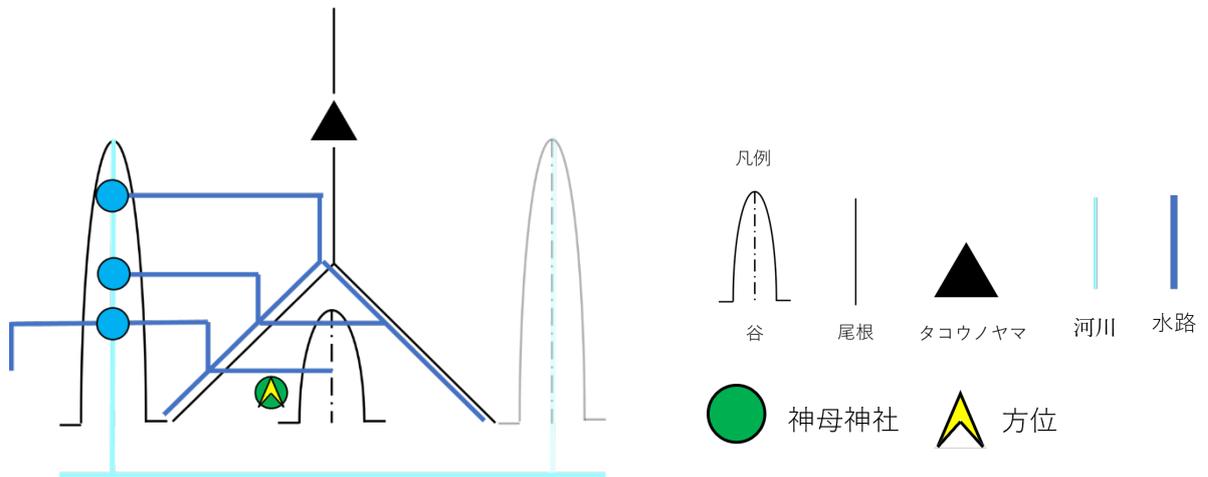


図 3-26 神母神社の空間構成

・共同墓地

共同墓地は、奥有瀬と下有瀬の間、有瀬の木馬道そばに位置している。共同墓地は有瀬集落全体で共有しているが、墓地が増え続けてその場所にはいりきらなかった際には個人で場所を決め置くようになった。



図 3-27 共同墓地の配置

凡例

▲ タコウノヤマ

— 木馬道

○ 共同墓地

・共同墓地の空間構成

共同墓地は奥有瀬と下有瀬の間、有瀬の木馬道は奥有瀬と下有瀬の境界を垂直に分けるようにあるが、共同墓地は2つの尾根に挟まれた山腹の奥有瀬と下有瀬の境界部分にあたる。

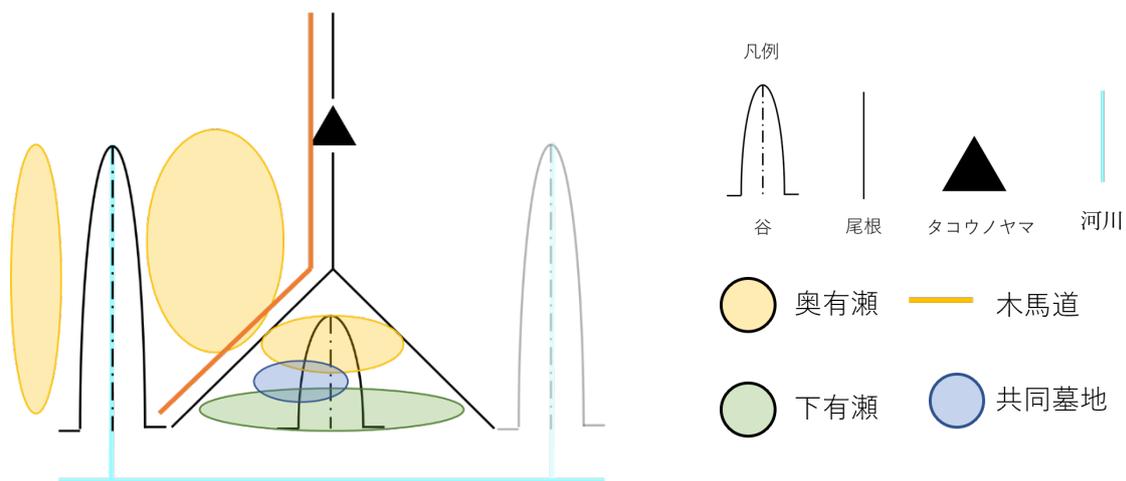


図 3-28 共同墓地の空間構成

・観音堂

観音堂は奥有瀬と下有瀬の間に位置しており、木馬道の近くに置かれている。
お堂は祭りをする際に集まる場にも利用されており、手前は広場のようにになっている。



図 3-29 観音堂の配置

凡例

▲ タコウノヤマ

— 木馬道

○ 観音堂

・ 観音堂の空間構成

観音堂は2つの尾根の西側尾根線である有瀬の木馬道沿いにあり、奥有瀬と下有瀬の間に位置している。

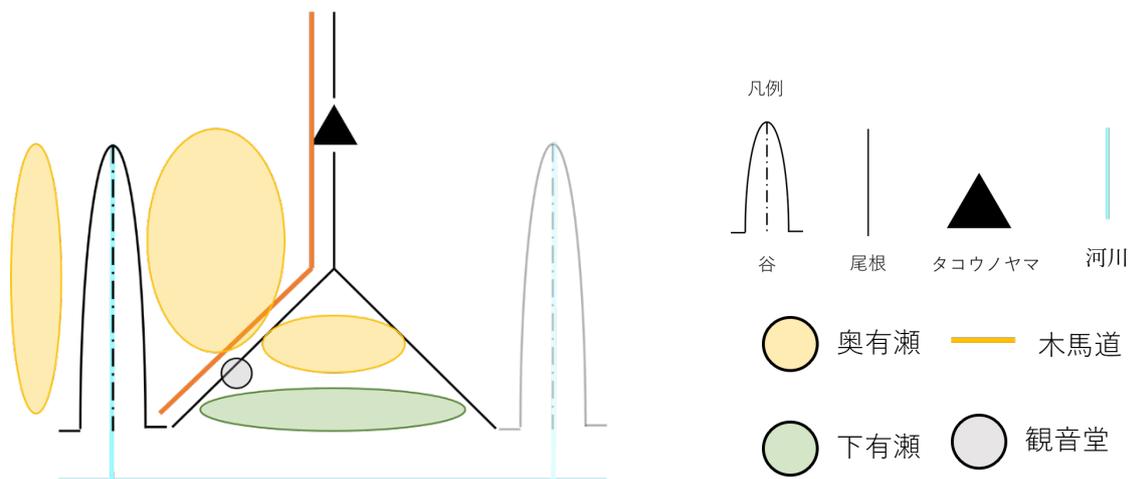


図 3-30 観音堂の空間構成

・先祖八幡

先祖八幡は文字通り各氏の先祖を祀る祠である。奥有瀬の有瀬川兩岸、下有瀬の木馬道付近の居住地に計4つの先祖八幡が置かれており、それぞれ居住地のそばに置かれている。

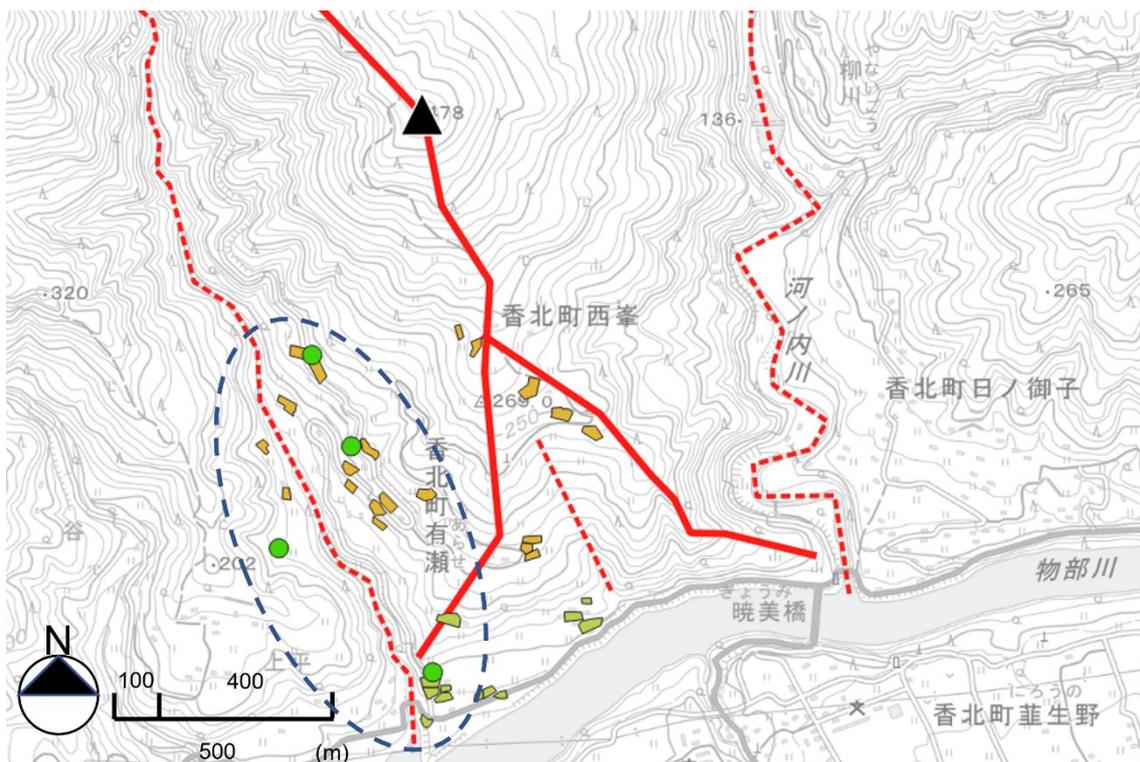


図 3-31 先祖八幡の分布

凡例

- ▲ タコウノヤマ
- 尾根線
- - 谷線
- 先祖八幡
- 先祖八幡が置かれている領域
- 奥有瀬居住地
- 下有瀬居住地

・先祖八幡の空間構成

先祖八幡は有瀬川兩岸、下有瀬の木馬道付近に置かれており、またそれぞれ居住地のそばに置かれている。物部川沿いの居住地や、木馬道付近の居住地にはみられなかった。

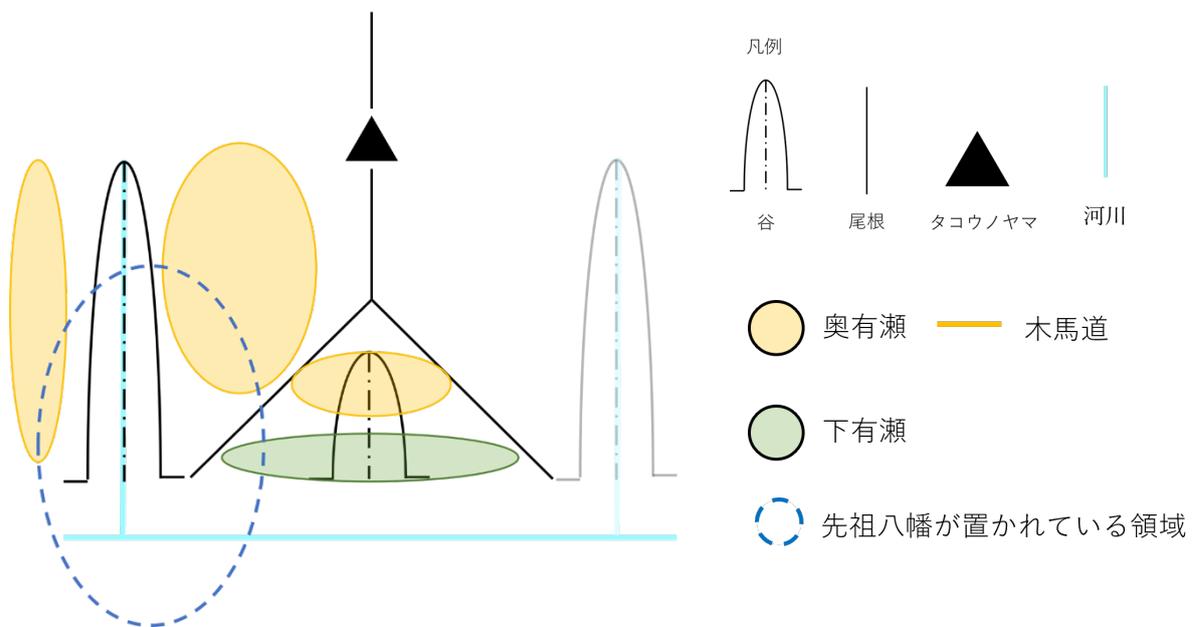


図 3-32 先祖八幡の空間構成

3-3 西峯集落の空間と空間構成

○自然条件

- ・立地地形（西峯集落）

集落東に南北に流れている河ノ内川、タクウノヤマから南に下り、東西2手に分岐している尾根のうち東側の尾根線、南に東西に流れる物部川に囲まれている。尾根線と河ノ内川に挟まれた山腹が西峯、山麓の物部川付近には商業をしている河口がある。

地形について、山麓の河口と物部川は約20mの高低差がある。河ノ内川は勾配がほとんどなく、そばにある農地とは約40mの高低差がある。

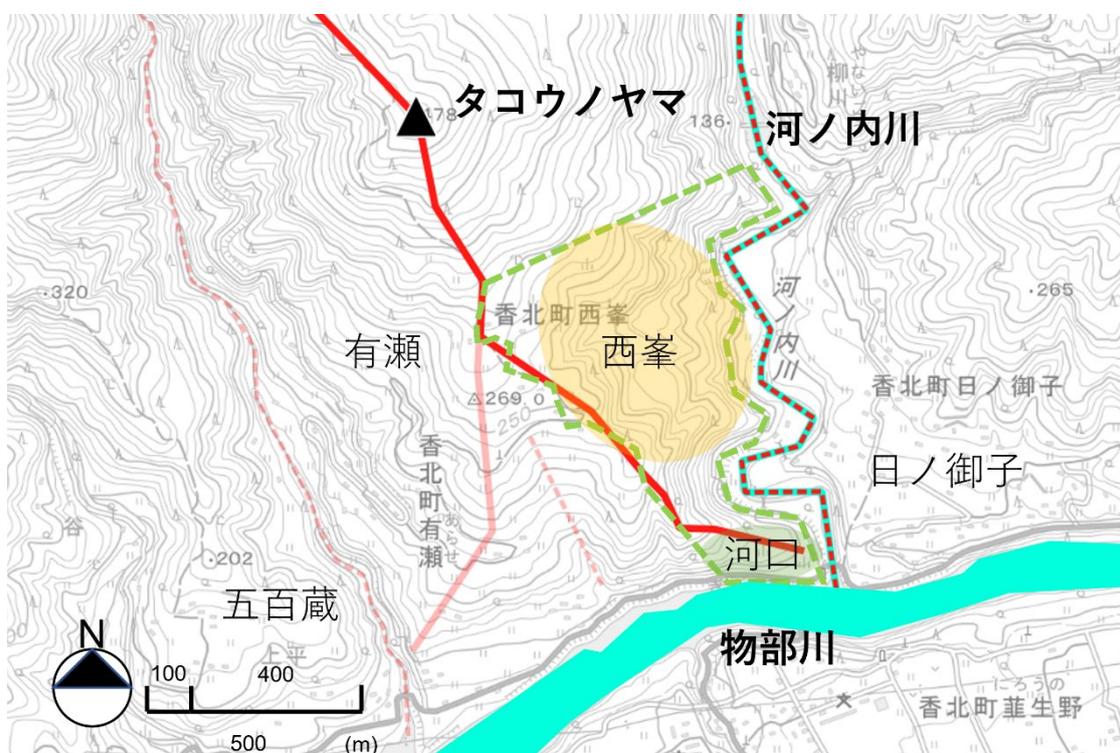


図 3-33 立地地形（西峯）

凡例

- 尾根線
- - - 谷線
- 河川
- - - 集落境界

・立地地形の空間構成（西峯集落）

西峯は集落東に南北に流れている河ノ内川、タコウノヤマから南に下り、東西2手に分岐している尾根のうち東側と南に東西に流れる物部川に囲まれている。東側尾根線と河ノ内川に挟まれた山腹が西峯、物部川沿いの山麓は河口と呼ばれる。

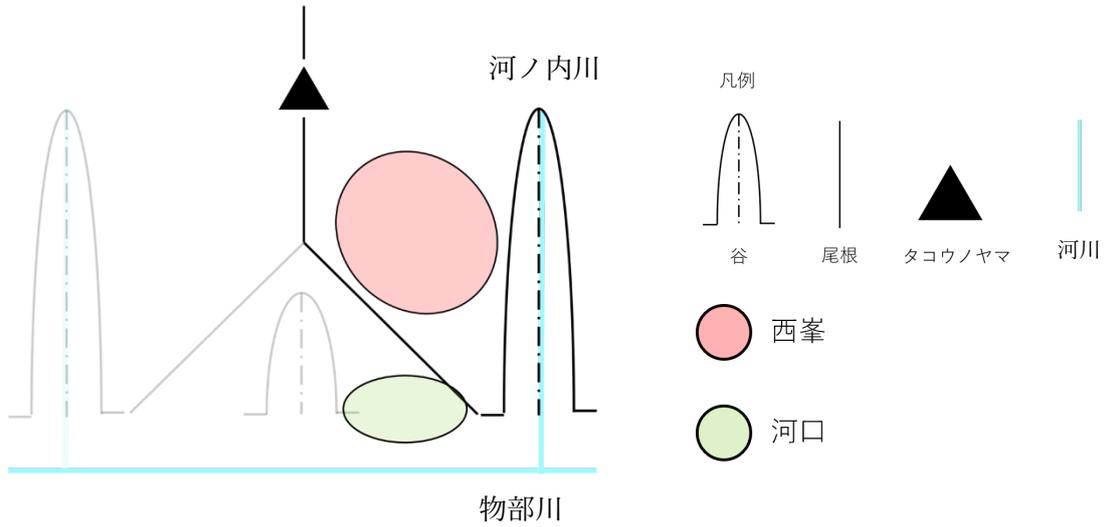


図 3-34 立地地形の空間構成（西峯）

○人為的空間（西峯集落）

・水系（西峯集落）

主たる水路はタクウノヤマより北、古井集落との間にある沢から取水する奈路井は等高線に沿って木馬道かつ新井の分岐点付近まで引かれている。有瀬川から引いている新井は有瀬と有川集落との間から取水し、尾根線の分岐に沿って引いている。また西峯の居住地近くにはため池を設けており、河ノ内川からの取水は先述したように高低差があり、河ノ内川自身の勾配もないことから取水は不可能である。河口は生業が農業ではなく、近くに取水する水路などは見られなかった。



図 3-35 水系の分布（西峯）

凡例

▲ タクウノヤマ

— 尾根線

- - 谷線

— 水路

— 水路

● 取水地

● 取水地

・水系の空間構成（西峯集落）

有瀬と異なり谷からの取水が不可能な西峯は、古井集落との間にある奈路井、有瀬、有川集落の間から取水している新井を2つに分岐する尾根線を利用して2集落に分岐して利用している。

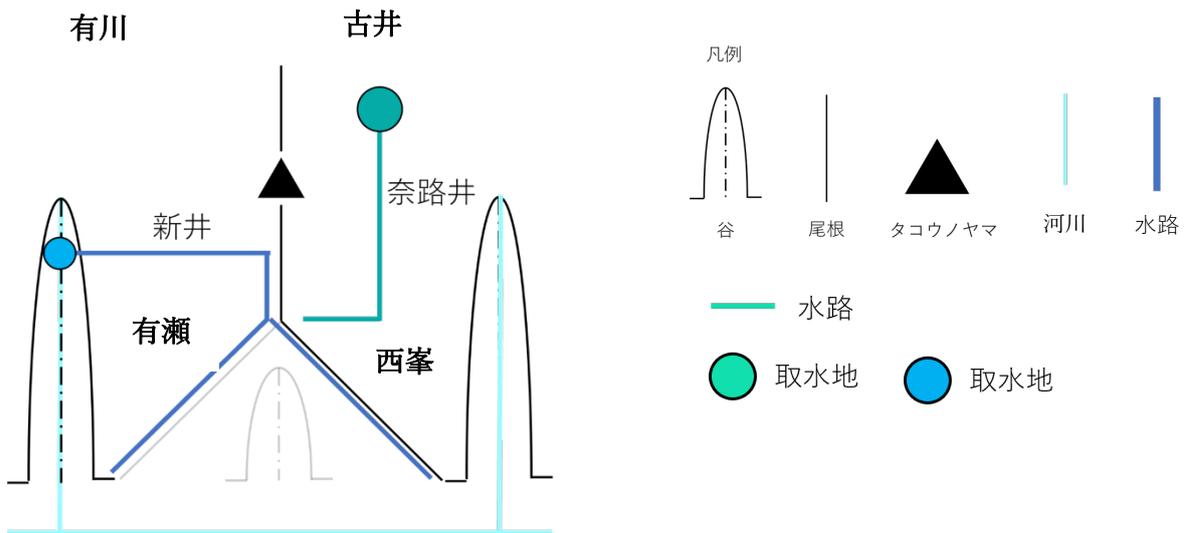


図 3-36 水系の平面空間構成

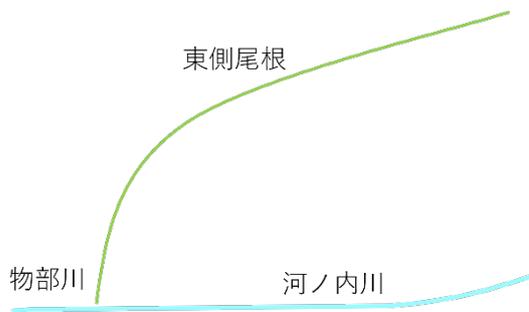


図 3-37 水系の断面空間構成

・街路（西峯集落）

街路はタコウノヤマから南に2手に分岐している尾根の東側尾根線に沿って置かれている木馬道がある。この道は先述した新井の分岐した水路が引かれており、また有瀬集落との境界線としても位置付けられている。木馬道は山腹の西峯と河口をつなぐ集落の幹線道路の役割がある。



図 3-38 街路の分布（西峯）

凡例

- ▲ タコウノヤマ
- 尾根線
- - 谷線
- 水路
- 木馬道

・街路の空間構成（西峯集落）

街路はタコウノヤマから南、2手に分岐している尾根の東側尾根線に沿って木馬道がある。この道は先述した新井の分岐した水路が引かれており、西峯の木馬道は山腹の西峯と河口をつなぐ集落の幹線道路の役割がある。また有瀬集落の奥有瀬、下有瀬との境界線としても位置付けられている。

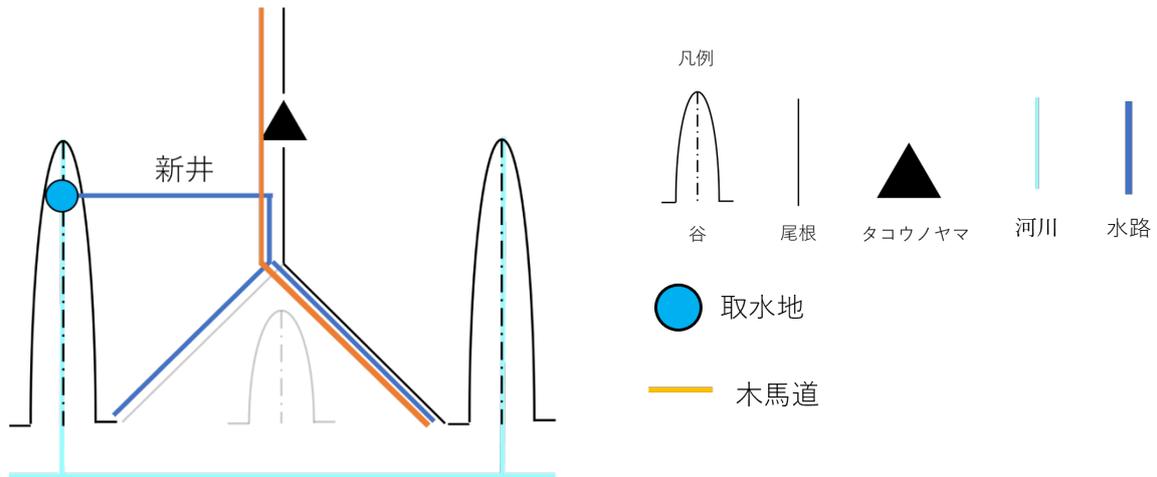


図 3-39 街路の空間構成（西峯）

・農地（西峯集落）

農地は山腹にあり、河ノ内川から取水できないので、有瀬川からの新井を分岐したものの、古井集落の間にある奈路井やため池から利水するなど、西峯自体の地形は取水が不適であるといえる。また西峯の農地である河ノ内川に向いている斜面地は谷地形に挟まれた尾根地形があるなど、その形状は不定形である。また農地は西峯集落の領域外である新井の分岐点付近にあること、西峯集落の領域に日ノ御子の農地があるなど、集落の領域を超えた農地のありようがみられる。

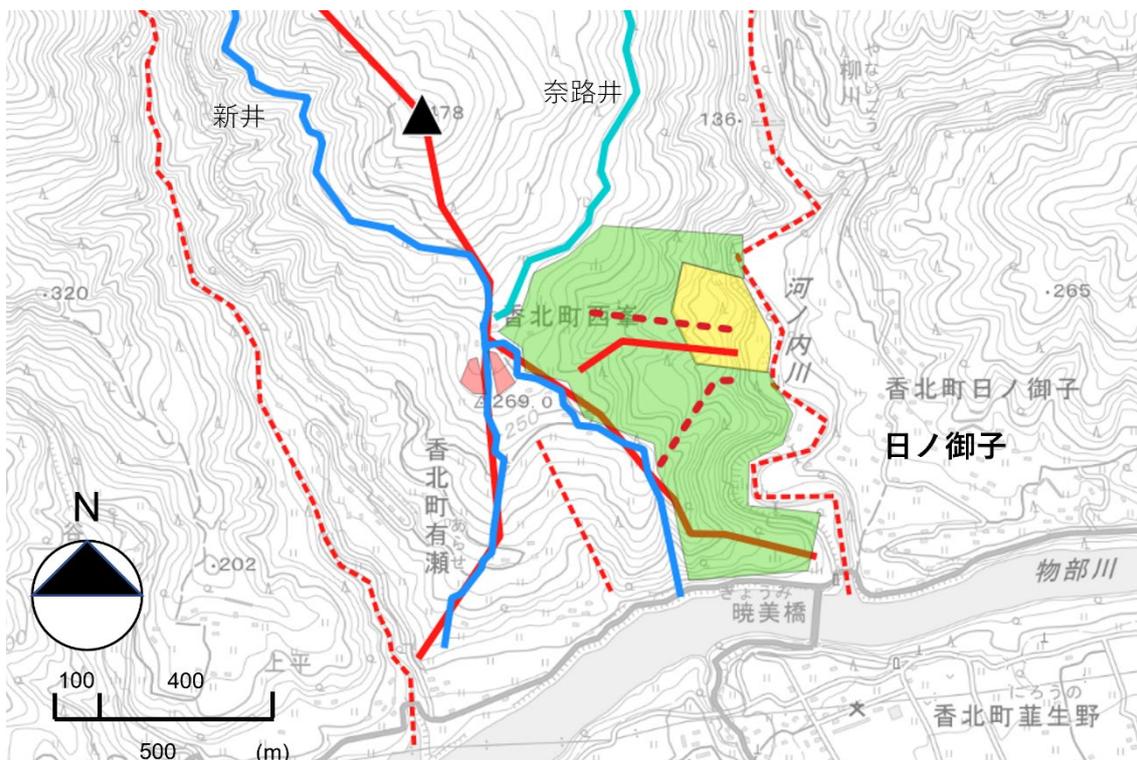


図 3-40 農地の分布（西峯）

- 凡例
- ▲ タコウノヤマ
 - 農地(有瀬領域)
 - 尾根線
 - 農地(日ノ御子)
 - - 谷線
 - 水路
 - 水路

・農地の空間構成（西峯集落）

農地は山腹にあり、河ノ内川から利水することができないので古井との間にある沢から引く奈路井や有瀬、有川間の有瀬川から引いた新井を2つに分岐する尾根線で分けることで利水している。また有瀬と違い、河ノ内川を向いている斜面地は谷に挟まれた尾根地形があり、不定形な形状をもつ。

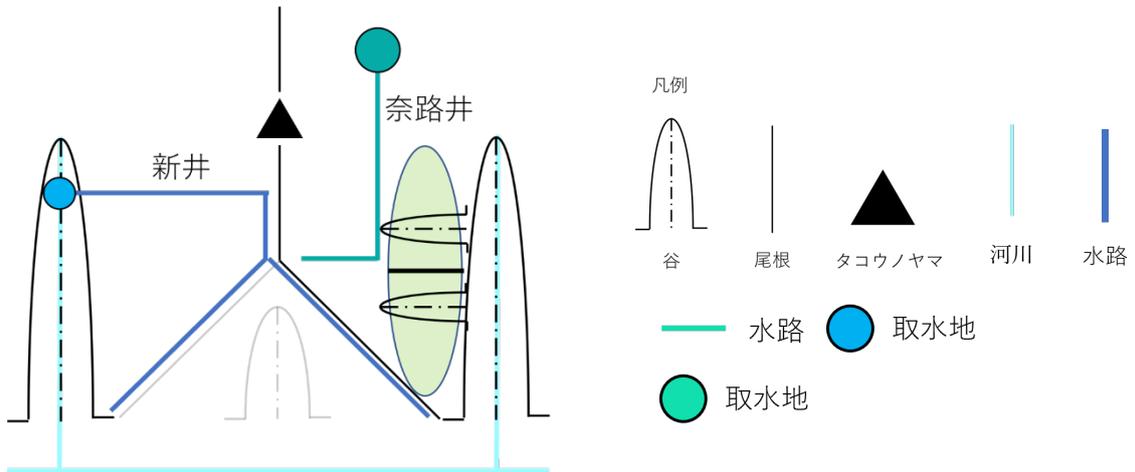


図 3-41 農地の空間構成（西峯）

・居住地（西峯集落）

西峯の居住地は新井が分岐して流れる2つの尾根線のうち東側である西峯の木馬道の散在しており、母屋は現存のものと同じ南向きであることが空間調査とヒアリングでわかった。なお、河口はダム建設に伴い消滅しており、具体的な実態は把握できていない。



図 3-42 居住地の分布（西峯）

凡例

- | | | | | | |
|-------|--------|---|-------|---|----|
| ▲ | タコウノヤマ | — | 水路 | — | 河川 |
| - - - | 谷線 | — | 尾根線 | ▲ | 方位 |
| ■ | 西峯居住地 | ○ | 西峯居住地 | | |
| ■ | 西峯居住地跡 | ○ | 河口居住地 | | |

・居住地の空間構成（西峯集落）

西峯の居住地は2つに分岐する尾根線の東側、新井の分岐点でもある場所に位置し、母屋は南向きである。河口は物部川沿いの山麓にあったが、ダム建設に伴い消滅しており、具体的な実態は把握できていない。

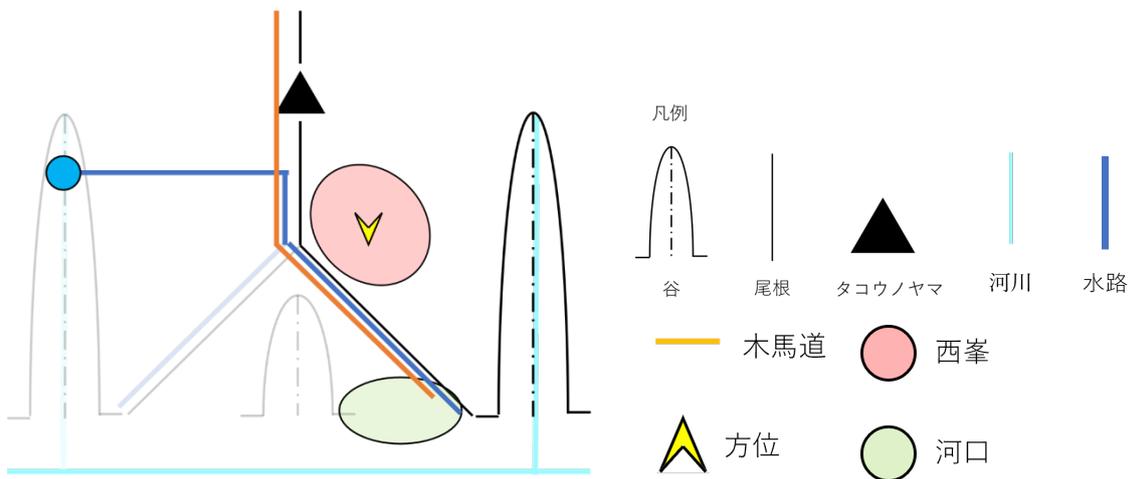


図 3-43 居住地の空間構成（西峯）

- ・ 信仰空間
- ・ 金峯神社（氏神）

氏神である金峯神社は2手に分かれた東側尾根線かつ西峯の木馬道から少し離れた場所に位置しており、方位は西峯氏を祀る八幡宮を向いていることや、西峯の木馬道から八幡宮、地蔵堂に至る道に金峯神社への参道がある。さらに「森っこ」と呼ばれる領域が山の神や金毘羅が位置する木馬道付近の尾根線からつづく斜面地に位置している。

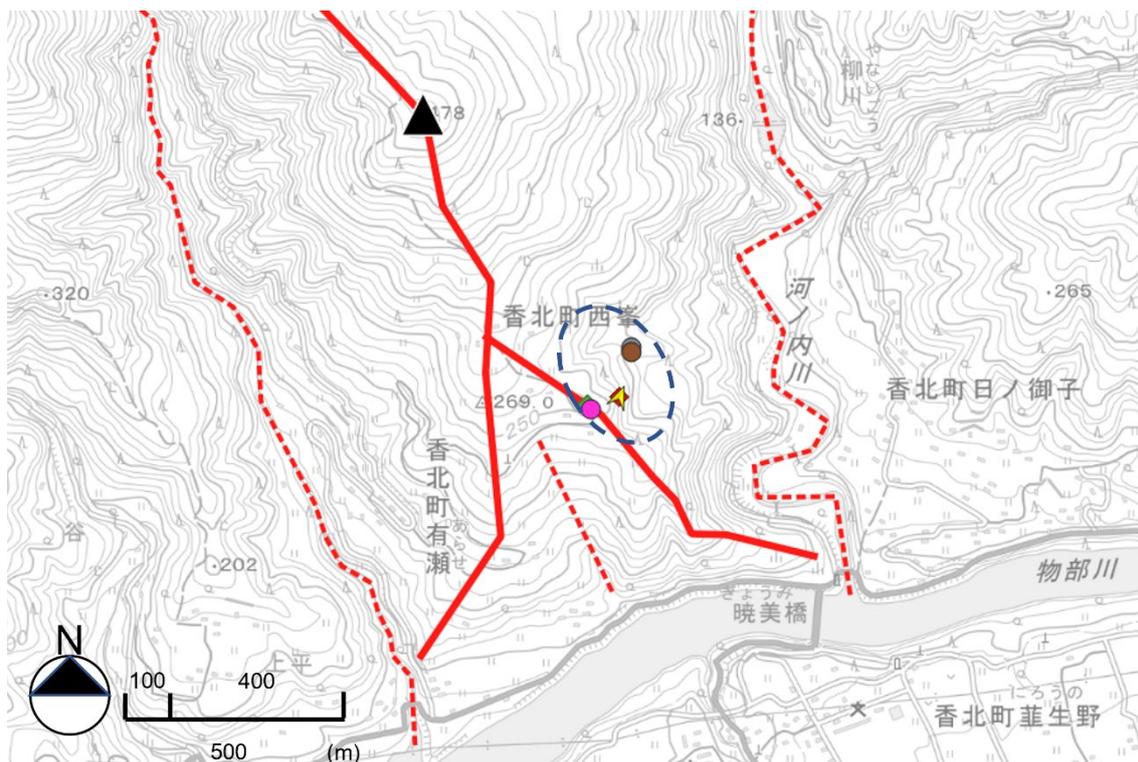
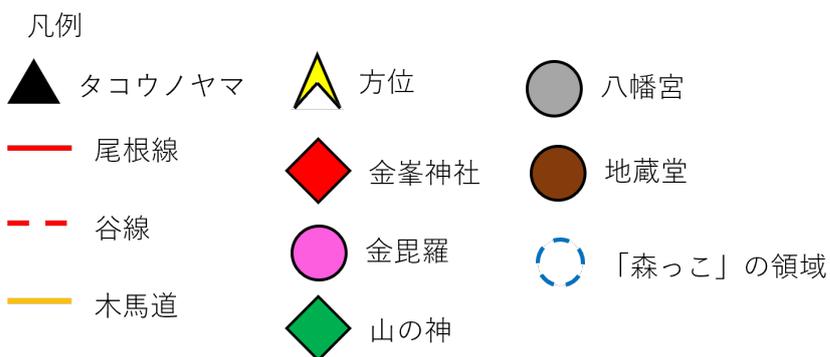


図 3-44 金峯神社の配置

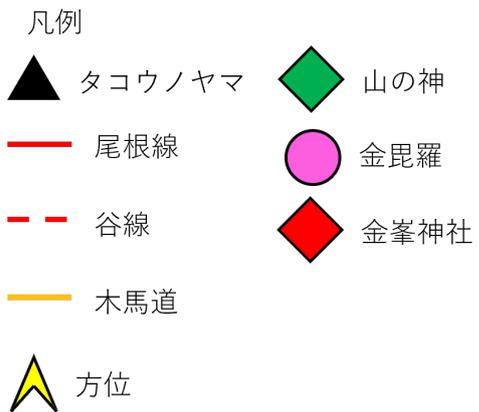


・山の神

2つに分岐した東側尾根線、西峯の木馬道そばに置かれており、タコウノヤマを信仰している。山の神が位置する尾根線上には金毘羅、氏神である金峯神社が置かれている。



図 3-45 山の神の配置 (西峯)

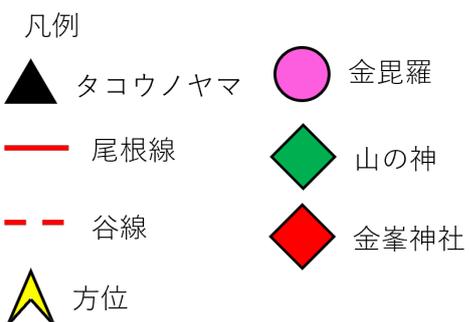


・金毘羅

有瀬、西峯の新井を利用しているコミュニティで信仰しており、岩の上に置かれている。金毘羅のある尾根線上は西峯の山の神、氏神である金峯神社が置かれている。



図 3-46 金毘羅の配置



・八幡宮・地藏堂

戦国時代西峯を治めていた西峯氏の左近守西念は仕えていた山田氏の側近の謀略により自害させられ、西念の妻子はそれを受け西峯にある城に火を放ち、身を投げた。城跡近くに置かれているという八幡宮は城主の西念を祀っており、そばにある地藏堂は妻子を祀っている。両者とも方位はタコウノヤマを向いており、歴史的いきさつから祀られているものでも、タコウノヤマという地形に対して応答することがうかがえる。

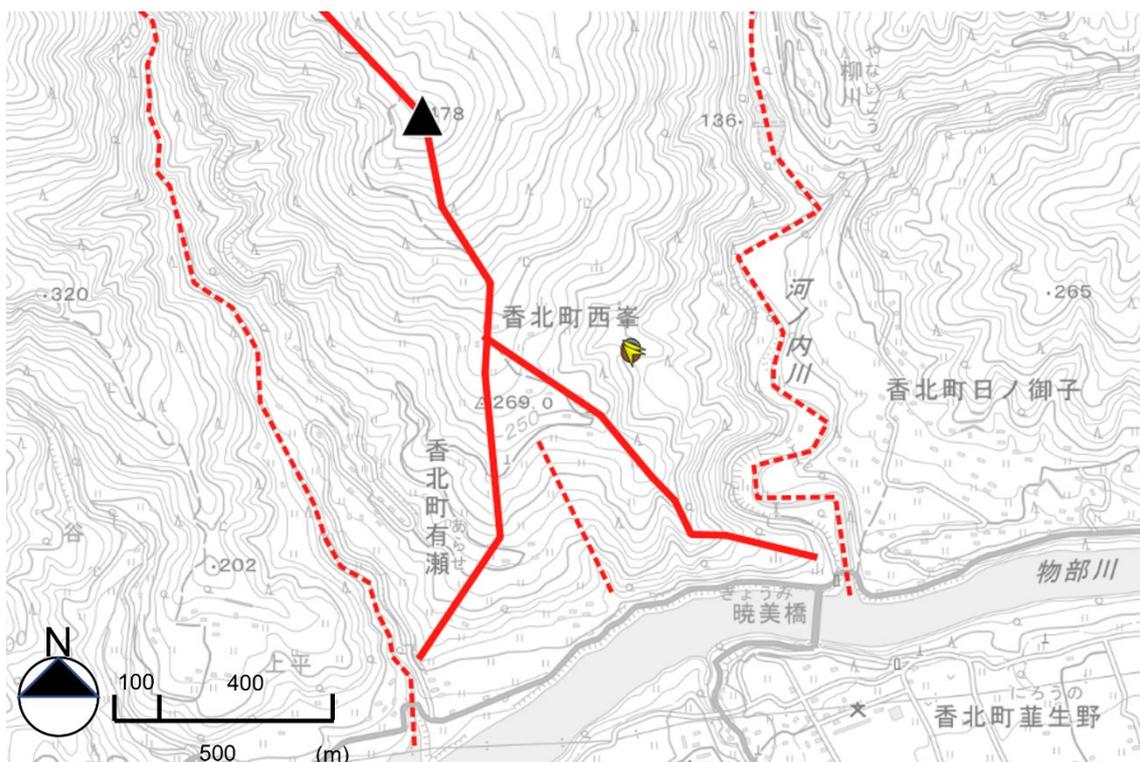
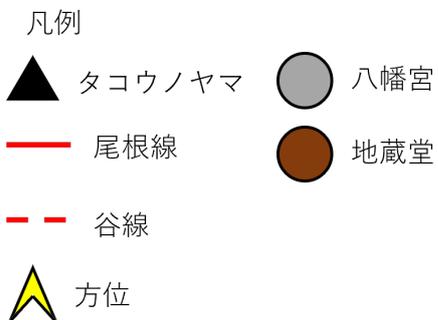


図 3-47 八幡宮、地藏堂の配置



・信仰地の空間構成

西峯の信仰地は木馬道がおる尾根線から少しずれた斜面地と、八幡宮、地蔵堂という西峯氏の歴史にまつわる信仰地がある。2つの場所は直接的な関係はないが八幡宮、地蔵堂はタコウノヤマに向かって置かれており、山の神、金毘羅は北を向き、タコウノヤマを望むことができる。また氏神である金峯神社は八幡宮、地蔵堂を向いており、木馬道から八幡宮へと続く道に金峯神社へとつながる参道があるなど、異なる地形の中でタコウノヤマという立地地形と関係をもつような空間を形成している。

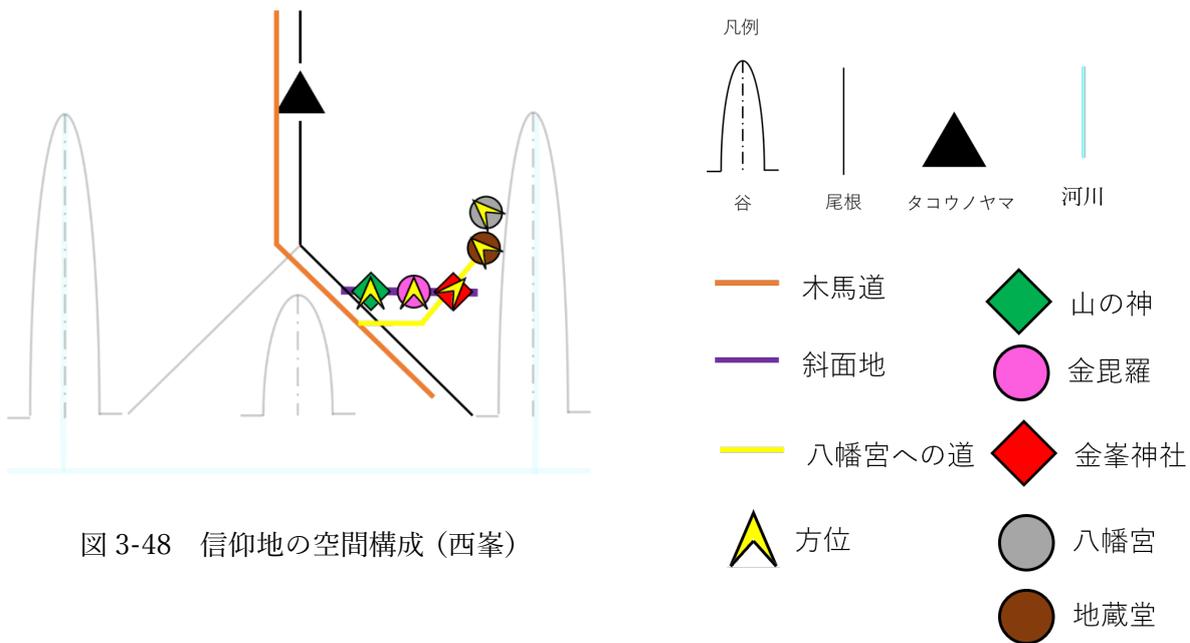


図 3-48 信仰地の空間構成 (西峯)

・日ノ御子の子祠

山麓の物部川沿い、暁美橋のたもとにある子祠は日ノ御子集落のものであり、水難によって亡くなった子供を祀っている。これから西峯の領域の中に、他集落の信仰のための場所を提供していることがわかる。また、その場所は日ノ御子との境界である河ノ内川のそばに置かれている。

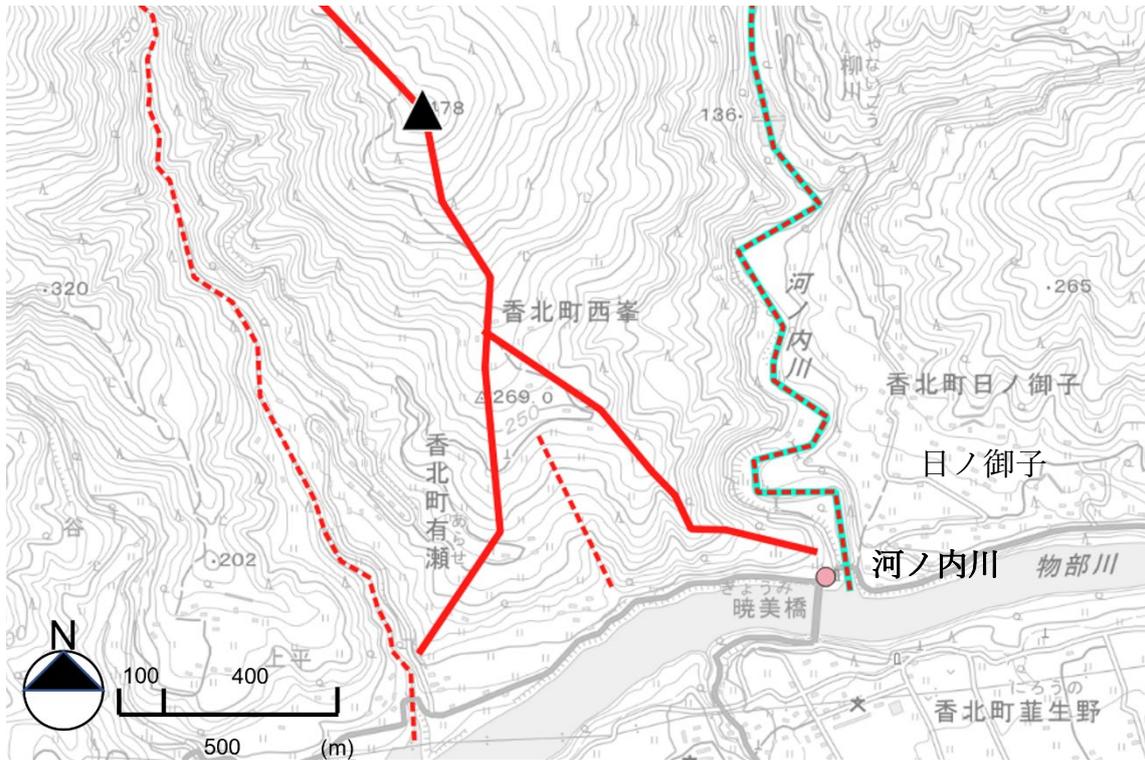


図 3-49 日ノ御子の子祠の配置

凡例

- ▲ タコウノヤマ
- 尾根線
- - 谷線
- 河川
- 日ノ御子の子祠

4章 有瀬、西峯集落の空間的特質

4章 有瀬、西峯の空間的特質

4章では空間的特質を明らかにするため、4章で明示した集落空間の要素ごとの空間構成を、1章で定義した集落空間の概念にもとづき、①集落空間の背景と根幹をなす地形立地と街路、水系②生業空間、③居住空間④信仰空間ごとにまとめ、その空間的特質を明示する。

1章では集落空間を自然条件と人為的空間からなるものとし、自然条件は立地地形、人為的空間は骨格である街路、水系のほか、農地、居住地、信仰地の5つに大別している。また自然条件と人為的空間の重なり合い、複合する集落空間の要素により集落空間は生業空間、居住空間、信仰空間に大別する。

具体的にはまず自然条件である地形立地と人為的空間の骨格を対象に、2集落それぞれにみられた特徴を改めてまとめ、それにもとづき、空間的特質を記述する。これを生業空間、居住空間、信仰空間についても同様に行う。最後に、前述した空間的特質を踏まえ有瀬、西峯の総合的な空間的特質を、1章で定義した空間概念図と共に述べる。

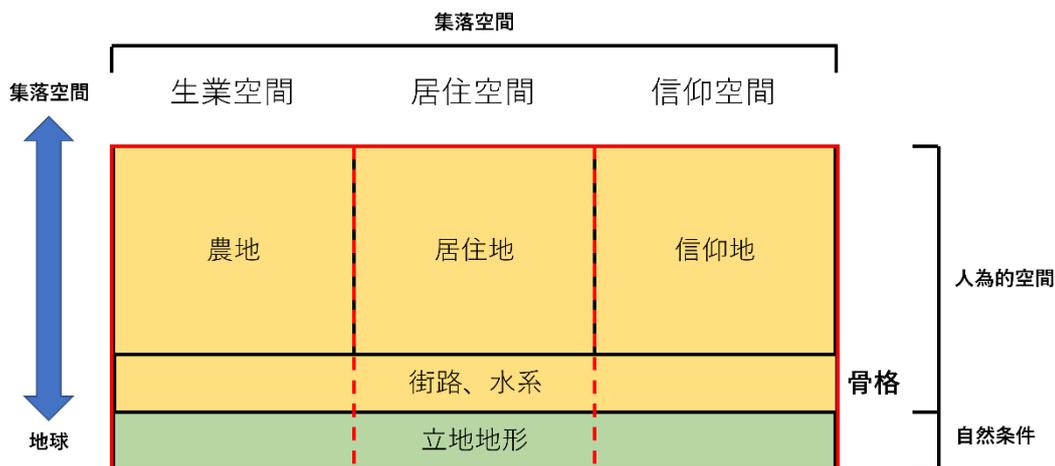


図 4-1 集落空間の要素

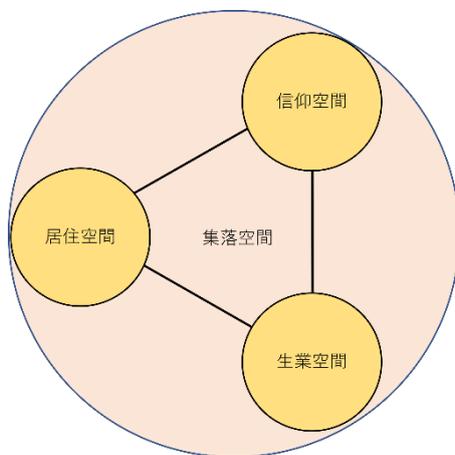


図 4-2 集落空間の概念

4-1 有瀬、西峯集落の空間的特質-集落空間の概念図を構成する要素に焦点を当てて-
 ・立地地形、人為的空間の骨格に見る空間的特質

有瀬

立地地形について、有瀬は集落西に南北に流れている有瀬川、タコウノヤマから南に下り、東西2手に分岐している尾根線、南に東西に流れる物部川に囲まれている。2つの尾根線に挟まれた河岸段丘が下有瀬、有瀬川両岸と東の尾根に挟まれた山腹が下有瀬である。有瀬の東西断面から、有瀬川と川沿いの農地はやく20mの高低差がある。また斜面地の等高線から規則性のある勾配を持つことがわかる。

人為的空間の骨格について、街路はタコウノヤマから2手に分岐する西側の尾根を木馬道としており、下有瀬と奥有瀬の境界線を形成している。主たる3つの水路はすべて有瀬川から引いている。これは有瀬川が持つ高低差により山腹の等高線と接する場所が多数存在することを指す。また水路は低い順に本田井、新田井、新井の順に成立している。最初に引かれた本田井は奥有瀬だけでなく、尾根線を越えて下有瀬の谷地形まで伸びている。3つの水路はともに標高を一定に保ちながら、有瀬集落内を流れる。排水路について、本田井は下有瀬中央部の谷、新田井と新井は西峯側の尾根線近くの谷に設置されている。ただし、新井は尾根線に沿って2手に分岐し一方は西峯側にも引かれている。

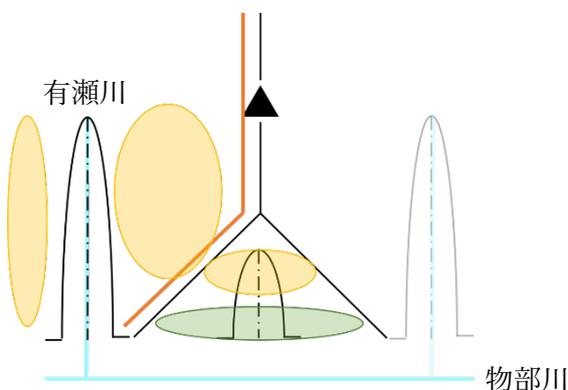


図 4-3 街路の空間構成 (有瀬)

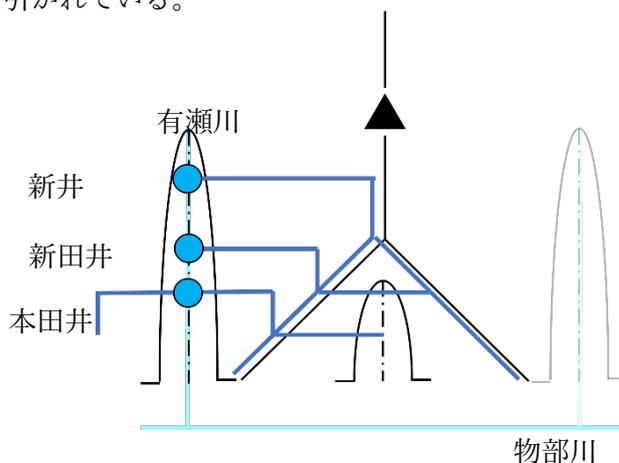


図 4-4 水系の平面空間構成 (有瀬)

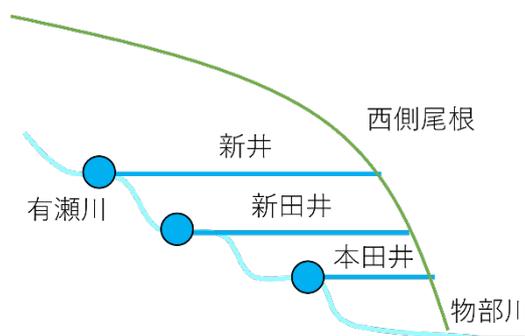
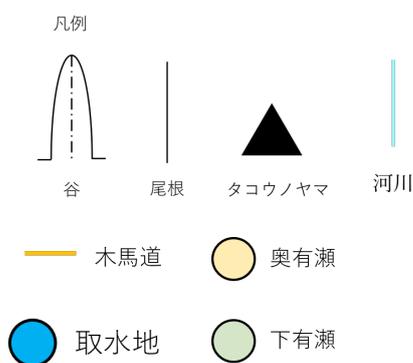


図 4-5 水系の断面空間構成 (有瀬)

西峯

立地地形について、西峯は集落東に南北に流れている河ノ内川、タコウノヤマから南に下り、東西2手に分岐している尾根線のうち東側の尾根線、南に東西に流れる物部川に囲まれている。尾根線と河ノ内川に挟まれた山腹が西峯、山麓の物部川沿いに商いを生業としている河口がある。また東側の尾根線と河ノ内川の間にある斜面地には東に向かって伸びる尾根とそれを挟む2つの谷が見られ、等高線からも勾配が不均一であることがわかる。

立地地形について、街路はタコウノヤマから2手に分岐する東側の尾根を木馬道としており、西峯と河口をつないでいる。主たる水路はタコウノヤマより北、古井集落との間にある沢から農業用水である奈路井、有瀬川から引いている新井を尾根線に沿って分岐し導いている。対象とする時代ではないが、西峯は江戸時代末期まで大峯池というため池をつくって利水をしており、水路だけではまかなえなかったことがわかる。河ノ内川と川沿いの農地は約30mの高低差があるほか、山腹の農地から距離があり、かつ農地がある山腹の等高線と接するような高低差も持たないので、引水することができない。

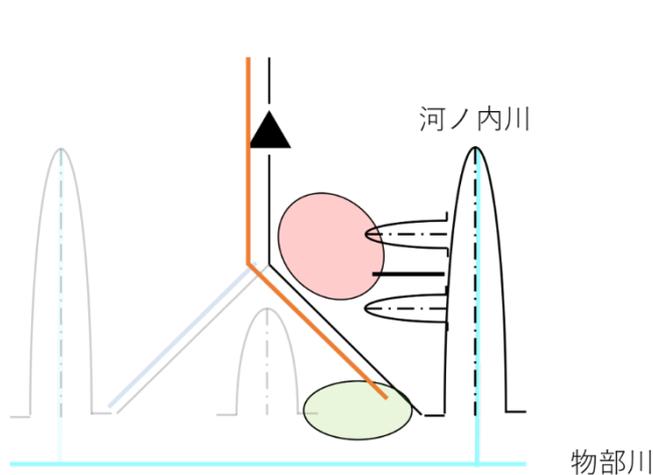


図 4-6 立地地形の空間構成 (西峯)

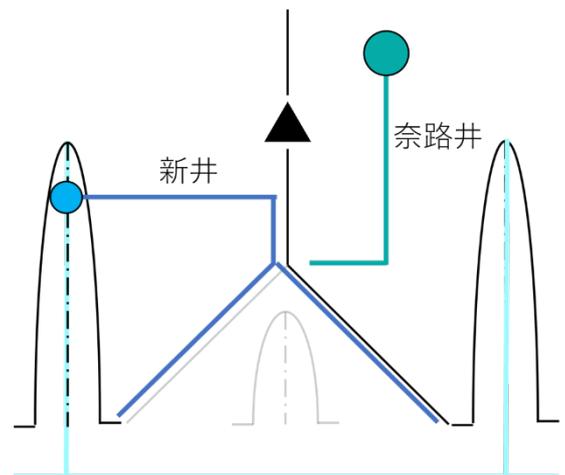


図 4-7 水系の平面空間構成 (西峯)

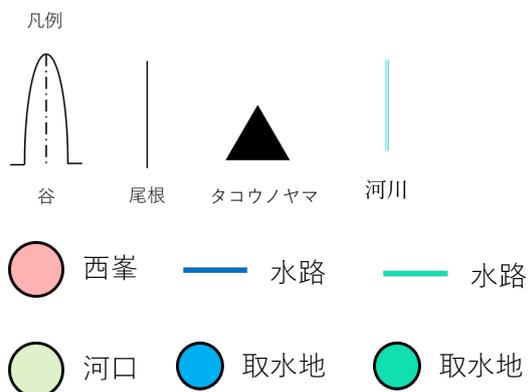


図 4-8 水系の断面空間構成 (西峯)

上記から改めて空間的特質をまとめる。

立地地形について、有瀬、西峯集落の全体空間は東西にそれぞれ南北に通る河川、南北に伸びる物部川が境界をなす山地地形である。山地の中央にはタコウノヤマを頂点とし、南にむかって東西に分岐する尾根線が走る。その平面構成はほぼ線対象である。しかし断面構成において有瀬川と河ノ内川の山地に対する高低差が大きく異なり、ここで大きな非対称が発生する。

人為的空間の骨格は上記の立地地形の特性に大きく規定される。有瀬の有瀬川は高低差があり山地と接する等高線を持つので取水がしやすく、3本の水路が等高線沿いに形成され集落内を流れる。その一方西峯の河ノ内川は高低差がなく、平面的、断面的ともに距離があることから山地と接することがなく、取水ができない。よって利水を古井集落との間にある沢からの奈路井や、有瀬の新井から利水している。両集落は対象的な平面構成から非対称な利水システムをもつ。一方街路については、タコウノヤマから東西に分岐する尾根線がそのまま両集落の木馬道となり、西の木馬道は有瀬集落の下有瀬と奥有瀬の境界、東の木馬道は下有瀬および奥有瀬と西峯の境界をなす。尾根線かつ木馬道のライン、河川が通る東西の谷は集落の骨格をなす。

・生業空間に見る空間的特質

有瀬

有瀬は奥有瀬、下有瀬ともに農業を生業としており、農閑期には木馬道を利用し山から材木をおろして有瀬川の河口から船で下流に運んだ。これは史実からも有瀬川の河口が有瀬、有川などの産物の集荷場であったことがわかる。農地は水路より低い場所しかつくれないので、新たな水路ができることで、より標高が高い場所へと農地が拡大していった。これは自然地形としての谷、尾根含む山地が水路の成立に従って上方に人為的な拡大をしたといえる。また有瀬川の右岸の農地は五百蔵の領域であり、領域を超えて農地があることがわかる。奥有瀬の農地は斜面地におかれているが、勾配が規則的であり、農地の大きさは一定である。また戦国時代の葦生谷地検帳から、下有瀬の耕地は熟田の比率が高く、収穫量が多いことがわかっている。

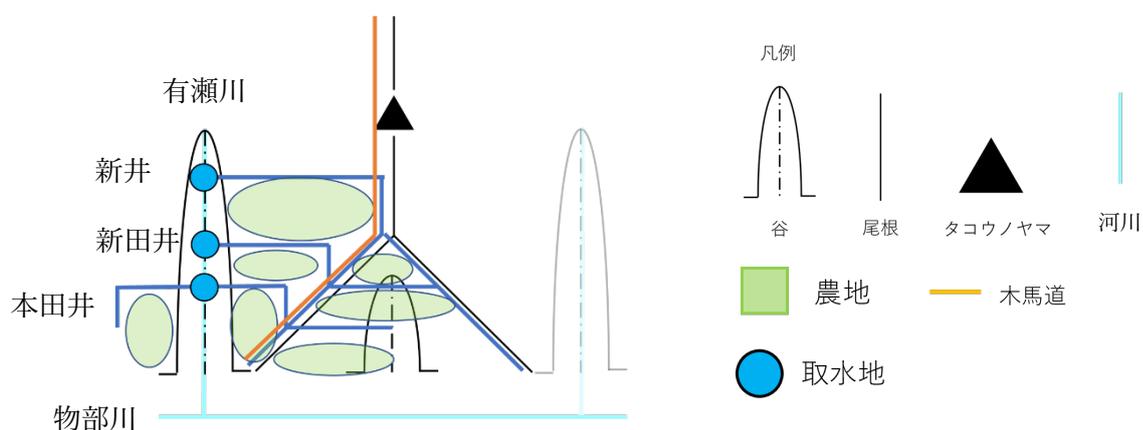


図 4-9 生業の空間構成 (有瀬)

西峯

西峯は山腹の西峯は農業、山麓の河口は商業を生業としている。農地について、戦国時代の葦生谷地検帳では耕地は下々田が目立つとあり、収穫があまり見込めない。農地は山腹、にあり、先述した通り河ノ内川から取水できないため、沢やため池、有瀬の新井から利水している。有瀬の山腹の農地と比べて不定形であり、勾配も急であることから、西峯の山腹は農地にはあまり適していない。また有瀬の領域に西峯の農地、西峯の農地に河ノ内川の対岸である日ノ御子集落の農地があるなど、領域を超えた農地がみられる。

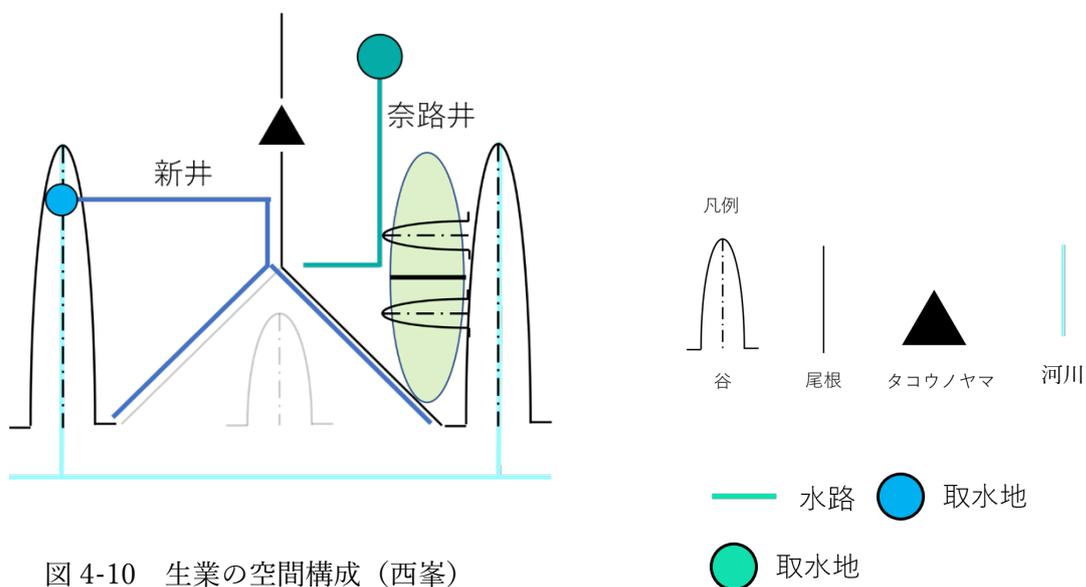


図 4-10 生業の空間構成 (西峯)

上記から生業空間にみる空間的特質をまとめる。

物部川沿いにある河口を除き、有瀬と西峯は棚田集落である。棚田のありようは、山地における水路の特性が直結している。有瀬では有瀬川から引いている3本の水路により、棚田が低いものから順に斜面上を合理的に拡大していった様子が明瞭に現れる。また物部川河岸段丘上にある下有瀬の棚田は奥有瀬と異なり物部川河岸段丘上にあるが、本田井から利水をしているなど、立地地形の枠組みを超えた生業領域を形成する。一方の西峯は河ノ内川から取水することなく、沢から取水した奈路井、有瀬川から取水した新井を利用している。これらは西峯の領域外から引いているため、集落の管理下とは言い難い不安定なものといえる。また農地も斜面勾配が不規則、かつその中に尾根線があるなど、生業である農地が地の利がなく非合理性が目立つものである。一方人為的空間の骨格である木馬道は物流を担うラインであり、有瀬は農閑期における物資の伝達などが行われている。

・居住空間に見る空間的特質

有瀬

奥有瀬は有瀬川両岸に居住地があり、母屋は谷に向けた正面性を持つ。また、谷に面した斜面地で約170m以上の標高差のある新井付近の母家も谷を向いている。初めに成立した水路である本田井に関わる居住空間として母家が谷向き正面を持ち、谷を挟んで向き合う関係性が成立したことが窺える。この性格は新たな水路である新田井、新井が成立し、居住地が拡大したのちも引き継がれている。また奥有瀬の居住地の一部は、東西に分岐した尾根線の東側、すなわち西峯の木馬道に沿っておかれている。ここには西峯へと分岐した新井が流れる。西峯の木馬道は有瀬との境界でもあり、谷向きの居住空間とは別種である。また、有瀬の木馬道でもある西側の尾根線の中腹にも居住地があり、南を向いている。これらは谷向き正面の特性はない。

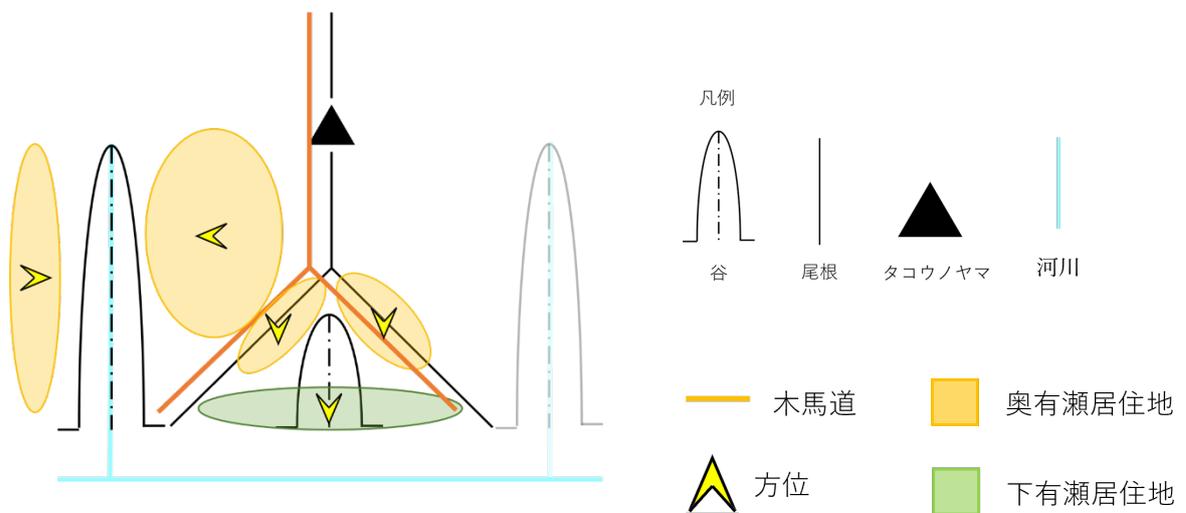


図 4-11 居住空間の空間構成 (有瀬)

西峯

西峯の居住地は分岐した新井が流れる東側の木馬道付近に散在している。母家は南向き正面である。なお、物部川沿いにある「河口」はダム建設に伴い消滅しており、具体的な実態は把握できない。

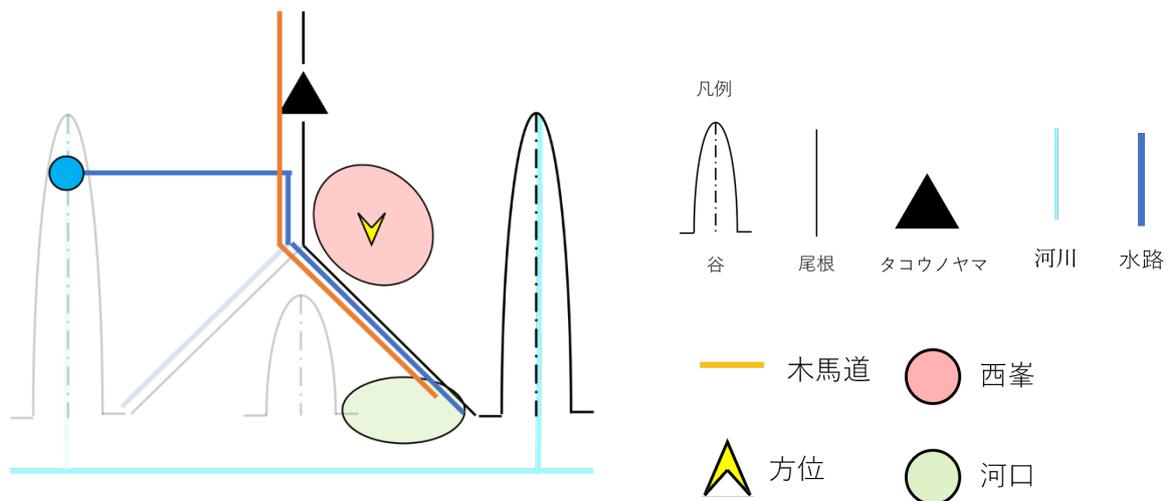


図 4-12 居住空間の空間構成（西峯）

上記から改めて居住空間にみる空間的特質をまとめる

本田井と共に成立した棚田集落である奥有瀬では、核となる有瀬川に対する谷向き正面の母屋を持つ。この性質は新田井、新井と新たな水路の成立による集落空間が拡大したのちにも引き継がれ、谷向きの斜面地かつ新井そばの居住地の母屋も谷向き正面をもつ。その一方尾根線である木馬道沿いにある居住地は、先述した谷向きの斜面地意外は南向きの母屋をもつ。下有瀬は本田井から利水している棚田集落だが、地形は南向きの河岸段丘であり、母屋も南向きを正面としている。

西峯の居住地は東側木馬道と新井分岐点付近に散在している。これらの母屋は南向きを正面とし、奥有瀬のように谷を向くことはない。このことは西峯の棚田が河ノ内側との利水がないなど無縁であることに起因するものと思われる。

・信仰空間に見る空間的特質

まず、集落単位の枠組みを超えた信仰空間について述べる、有瀬、西峯集落を含むこの山地にある集落を束ねるものとして三宝神社がある。これはタコウノヤマよりも北にある尾根線上におかれており、有瀬、西峯、有川、古井の四集落で共有されている。現在は有川、古井集落は住人がおらず、三宝神社はタコウノヤマより南の木馬道を少し下った場所に置かれている。このことから、三宝神社は集落同士を束ね、かつ境界としての役割を持っており、状況により適切な場所に置かれることがわかる。また、このことから有瀬、西峯集落の境界はタコウノヤマ山頂付近、新井の引き込み地点あたりということがわかる（図 5-10）。

次に水路単位のコミュニティがもつ信仰空間について述べる。水路がもつ信仰空間におサバイ様がある。これは同じ水路を利用して棚田を行っているもので祀り、本田井、新田井には固定した信仰地はないが祭礼は行っており、新井は木馬道から新井分岐点そばにある場所に信仰地を置いている。（図 5-11）

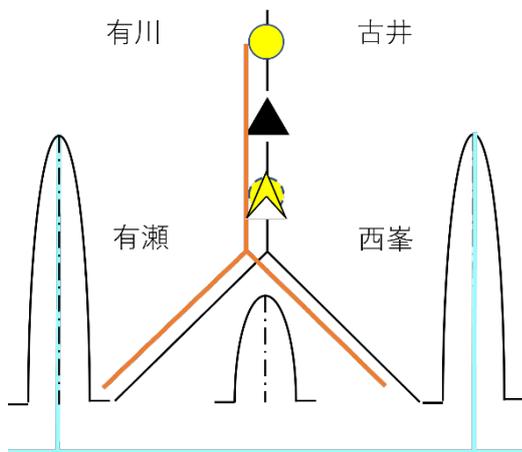


図 4-13 三宝神社の空間構成

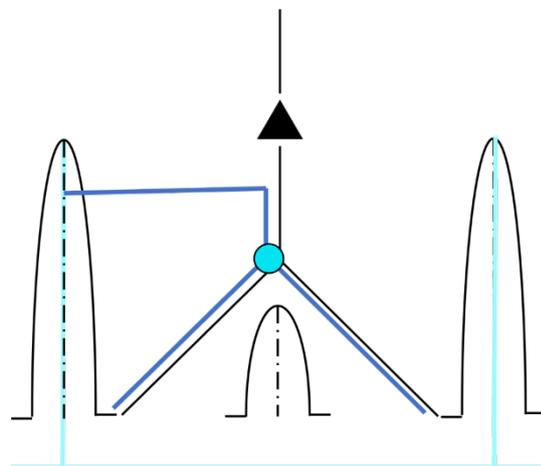


図 4-14 オサバイ様の空間構成

凡例



● 三宝神社

● 現在の三宝神社

有瀬

氏神を祀る奥有瀬山祇神社は有瀬川左岸の本田井に比較的近い位置に置かれている。このことから集落が成立した谷領域に深く関わりがあることがわかる。御身体は巨石であり、本殿背後に位置している。また神社の手前に水が流れるよう新田井から水を引いている。下有瀬には2つの木馬道に挟まれた領域の中央付近、に神母神社が置かれている。本殿は南向き正面であり、奥有瀬山祇神社と同じく手前に水が流れるよう本田井からの水を引いている。

水系に関わる信仰として新田井の取水地にとどろ様がある。有瀬川から引かれている3本の水路のうち取水地に信仰地を持つものは新田井のみであり、新田井がもたらす農地の拡大など、井による影響の大きさがうかがえる。

西側の尾根線、有瀬の木馬道沿いかつ新田井から少し登った森に山の神を祀っており、上方にあるタコウノヤマがうかがえる。奥有瀬の有瀬川兩岸、下有瀬の木馬道付近の居住地には計4つの先祖八幡が置かれている（図4-12）。これは各氏の先祖を祀るものであり、それぞれが各氏の屋敷地そばに置かれている。

有瀬は共同墓地を2つに分岐した西側尾根、有瀬の木馬道そばに置いており、奥有瀬と下有瀬の境界に位置する信仰地である（図4-13）。共同墓地よりも木馬道の近くには観音堂があり、祭りの際に集まる集会場の役割も担っていた。

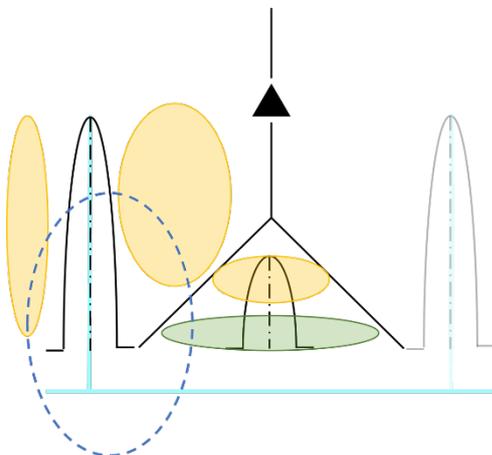


図 4-15 先祖八幡の空間構成

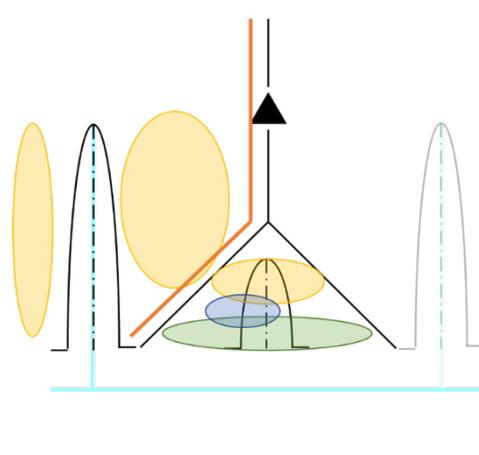


図 4-16 共同墓地の空間構成



西峯

氏神である金峯神社は東側尾根線かつ西峯の木馬道から少し外れた場所に位置しており、配置において地形的特徴や、周辺の地物に反応しているわけでもない、西峯のその他の主要な信仰空間に対して空間を構成している。具体的には金峯神社が向いている軸線が西峯氏を祀る八幡宮を向いていること、八幡宮に至る道から神社に直接繋がる山道があることが挙げられる。さらに、「森っこ」と呼ばれる山の神や金毘羅が位置する木馬道付近の尾根線から続く斜面地に位置している。

先述の八幡宮は、その横に地蔵堂が置かれている。八幡宮は謀略により命を落とした戦国時代の領主西峯氏を祀っており、地蔵堂は後を追って命を絶ったその祭司を祀っている。これは西峯氏の屋敷跡地の近くの尾根地形上に置かれている。両者とも、その社殿中心軸はタコウノヤマを向く。また山の神を祀る場所が木馬道のそばの尾根線上にある。このそばの岩上には金比羅が祀られている。

西峯では、有瀬と異なり、先祖神を有する屋敷地はない。

山麓の物部川沿い、暁見橋のたもとにある小祠は日ノ御子のものであり、水難によって亡くなった子供を祀っている。他集落の信仰のために場所を提供していることがわかる。

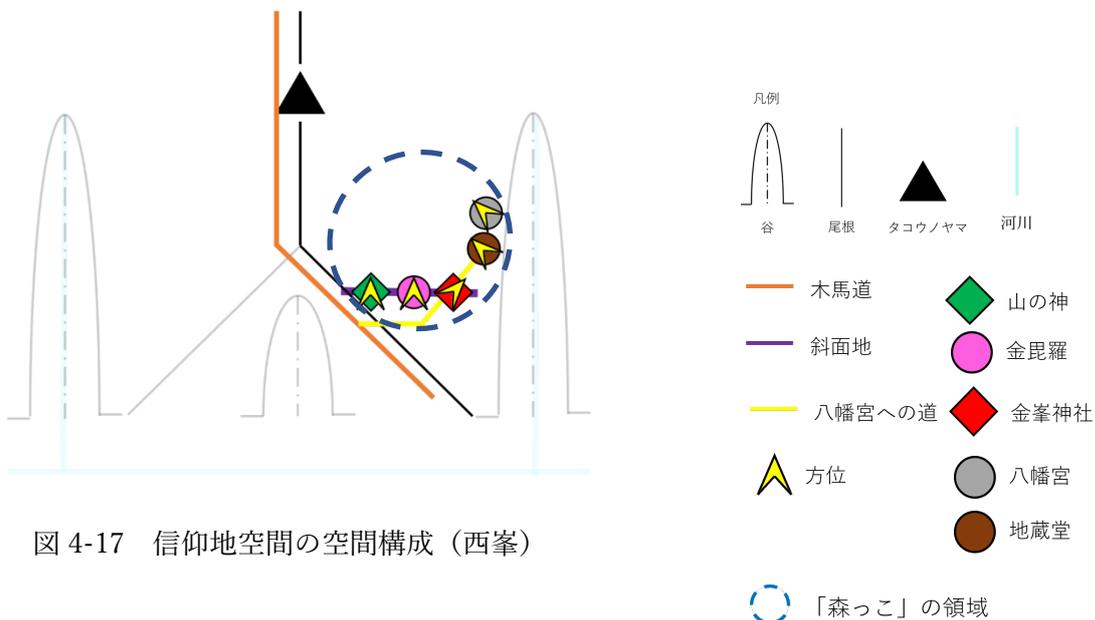


図 4-17 信仰地空間の空間構成（西峯）

上記から改めて空間的特質をまとめる。

本田井とともに成立した棚田集落である奥有瀬は、信仰空間においても、その成立起源に関わるように本田井そばに氏神の奥有瀬山祇神社が置かれる。南向き河岸段丘地形にもとづく棚田集落、下有瀬には領域中央部かつ物部川沿いに神母神社が鎮座する。これらにはともに水路から引き落とされた水流が境内入り口に流れ、信仰空間の聖域化を強めている。これらから奥有瀬山祇神社、神母神社はともに棚田集落ということに関わりの深い神社であることがわかる。

これに対し西峯集落の一連の信仰空間は棚田に由来するものではない。西峯氏を祀る八幡宮と地藏堂、「森っこ」である木馬道そばの尾根線上の山の神と金比羅、この両者をつなぐように氏神である金峯神社は構成されている。八幡宮、地藏堂と「森っこ」はともにタコウノヤマが強く意識されている。前者は社殿軸がタコウノヤマに向かい、後者はその位置からタコウノヤマが極めてよく望むことができる。西峯の信仰地はタコウノヤマを頂点に西峯氏の歴史を祀る八幡宮、尾根線という地形的特徴を伴う聖地に山の神と金比羅が配し、それをつなぐように金峯神社が鎮座する。信仰空間として生業から自立した空間構成を持つ。

各集落を超えた枠組みとして、全体領域をたばねる三宝神社、水路コミュニティをたばねる信仰のオサバイ、集落内の境界にて異なる領域をつなぐ観音堂や共同墓地の存在がある。

これらの信仰地は対象とするさまざまな枠組みの中で、元来は異質な他者である地形、信仰の枠組みが異なる人々を分断することなく繋ぎ止める集落空間の要素であるといえる。

4-2.有瀬、西峯の総合的な空間的特質—集落の固有性と、共有の意味—

前節で有瀬、西峯の空間的特質を両者の比較とともに明示した。本節では、前節の記述にもとづき、各集落の固有性、両者における共有に焦点を当てて、その特質を明らかにする。最後に、「有瀬、西峯」、すなわち、一つの山地地形に並存する二つの集落の総合的な空間的特質について空間概念図と共に記す。

・有瀬と西峯集落の固有性

集落の固有性は、他者との比較によって、その差異が固有性だとわかる。本研究では、有瀬の固有性は西峯との差異、西峯の固有性は有瀬との差異によって示される。

有瀬のうち、中心的集落である奥有瀬は、有瀬川と、そこから取水された3本の水路によって成り立つ谷地形の棚田集落である。ここでは棚田という生業空間が、全てに先立つ。棚田は本田井、新田井、新井の、水路成立順に応じた位置を持つ。最も古い本田井では有瀬川を挟んで流れ、棚田も有瀬川を挟む。これに応じて居住地母屋は谷を挟んで互いに向かい合う正面性を持つ。この性質は最も新しい水路、新井そばの母屋でも反映されており、谷向き正面を持つ。氏神である奥有瀬山祇神社は本田井そばに設置され、新井、新田井からの水流を引き落として聖域としての性質をより強めている。棚田という生業空間を中核にして居住地や信仰地が構成されていることが最も大きな特色である。谷に対し尾根線には木馬道が走る。これは物流や人の行き来を担う交通の中核線であるとともに、領域を分節する境界線をなしている。具体的には東木馬道は西峯との、西木馬道は下有瀬との境界線をなす。下有瀬との境界線付近には観音堂や共同墓地という信仰地が配置され、両者を分けつつ繋げている。

これらから、有瀬集落の空間概念図は、生業、居住、信仰の3空間は生業空間を核として谷、水系が他の空間と相互に関係性を持っていることがわかる。

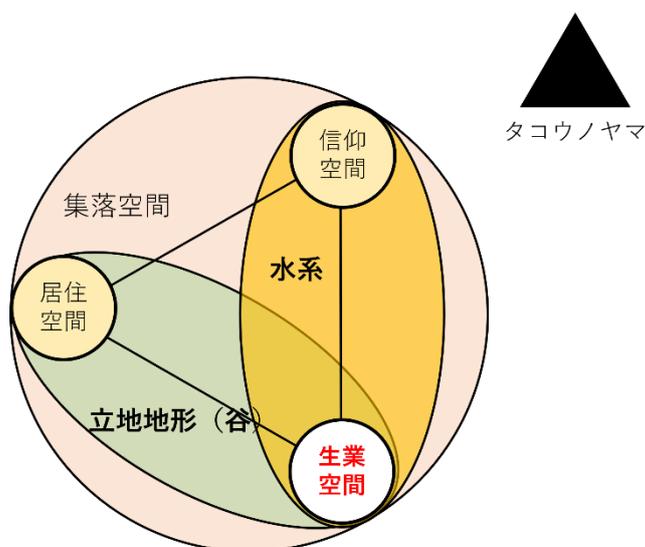


図 4-18 空間概念図（有瀬集落）

西峯は、西峯氏の屋敷地があったことを歴史の原点に据えている。西峯氏を祀る八幡宮はタコウノヤマを向く。氏神の金峯神社は八幡宮を向き、尾根線上「森っこ」の山の神と金比羅はタコウノヤマがよく望める場に鎮座する。タコウノヤマを頂点にした信仰地のネットワーク構成が極めて明快である。これに対して、生業は有瀬と違い、河ノ内川からの利水ができず、棚田を営むには極めて不利な地形立地である。それゆえ、信仰地空間の残余の谷がどうか棚田化されており、居住地の母屋も谷向き正面を持たず、南向きである。空間構成が明快な信仰地と比較するとこれら2要素の構成は弱い。

・有瀬、西峯の共有空間

上述したように有瀬と西峯の空間的特質を比較することで、その固有性があぶり出された。

生業を基準にするとともに「棚田集落」となるが、その在り方は全く違っている。その意味では、両者は互いに他者である。それが一つの山地地形に並存していることになる。この時、何が共有されるのかを見ていく。

地形立地に大きく関わる空間から順に共有空間を見ていく。有瀬、西峯は一つの山地地形であり、その頂点がタコウノヤマである。三宝神社が4集落共有時代から有瀬、西峯2集落共有時代に変化するにともなって、その位置をタコウノヤマ頂上の少し下に遷座したことは、この2集落全体を束ねるのがタコウノヤマであることを意味している。

次に地形の尾根線である。この線にもとづき木馬道が引かれる。この道は山地集落における共有の公道であり、かつ集落境界線でもある。奥有瀬、下有瀬、西峯はこのラインによって分節される。また分節するだけでなく、この境界線そばに信仰地を配置することで隣接する他者をつなぎとめている。その具体的な儀式がその場による祭礼であろう。奥有瀬と下有瀬との境界をなす木馬道そばには観音堂、共同墓地がある。観音堂では両者が集う祭礼がおこなわれ、墓地では両者による墓参がある。西峯と奥有瀬を分かち木馬道そばに「森っこ」があり、ここに鎮座する金比羅は西峯住民と奥有瀬木馬道そばの居住者双方によって祀られる。祭礼も両者が担う。

人為的空間のもう一方の水路では、同じ水路から利水する集団は、集落の垣根を越えてオサバイを祀り、祭礼を行う。本田井、新田井では、奥有瀬と下有瀬の両集落内の該当者が、新井では奥有瀬と西峯両集落の該当者が祀り、祭礼を執り行う。

生業空間である棚田は、集落縁辺においては越境した所有が見られる。現代にみられるその代表的なものとして奥有瀬最上部の棚田が、西峯集落住民に担われている例を挙げることができる。この棚田では春に田の肥料となる菜の花が植えられそれが「天空の菜の花畑」として、いまや名所と化している。棚田集落である有瀬の棚田に、祭礼を含む信仰空間組織が明確な西峯住民の手が混ざり合うことで起きた現象とも見ることができる。境界で、他者同士があり続けることを調停するために、信仰地を設定し祭礼を数々取り行って来た歴史があるからこそ、このような新しい現象もまた生起するのだと考えられる。

これらから、西峯集落の空間概念図は、生業、居住、信仰の3空間はバラバラな対象と関係を持つが、タコウノヤマに対する強い信仰の構えがみられることがわかる。

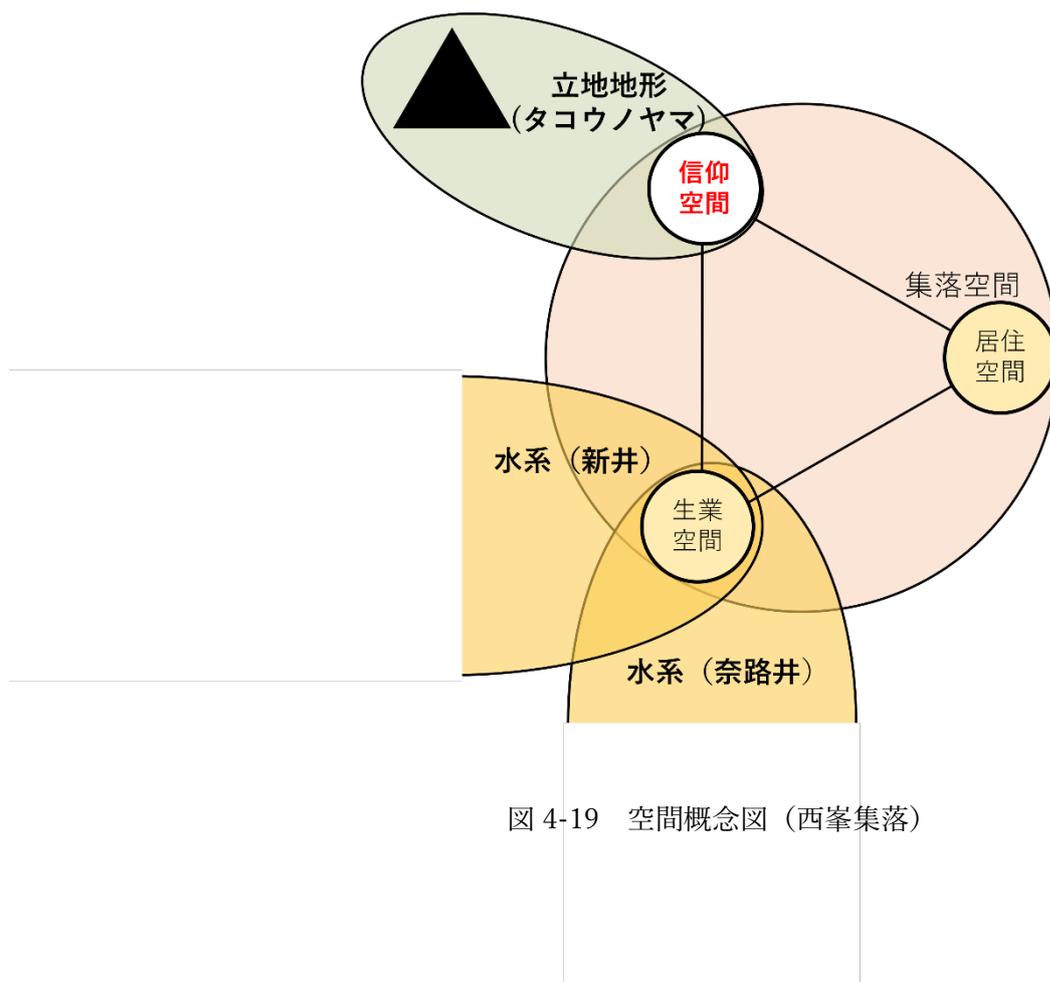


図 4-19 空間概念図 (西峯集落)

幾つかの他者が1つの共同体として1つの山地地形で共に生きるためには、立地地形を手掛かりとした境界を決定すること、さらにその境界を分断するために設けるわけではなく、境界で異なるもの同士が共に生きるよう共通の信仰を持つこと、この二つが必要不可欠である。有瀬西峯全体領域の頂部である三宝神社、尾根線上の聖地、水路線上のオサバイなどがその例である。

一方、個別のありようとして1つの集落単位が共同体であるためには、核となる空間に対して離れていてもその空間とかかわりを持つ（知覚させる）ように人為的空間をつくることが重要となる。有瀬川を核とした合理的な水路体系がある棚田集落を一つの共同体とする時、有瀬川から離れた新井沿いの居住地が有瀬川の谷に向かって母屋を向けていること、地形が異なる下有瀬に向けて本田井を尾根線を越えてでもつなげ、それが大きくは有瀬という共同体であること、これらはそういった措置の代表的事例である。

西峯については、西峯氏を祀る八幡宮の軸や尾根線上にある信仰地がその地で独立してあるのではなく、タコウノヤマを頂点に組織化されている。このことで、信仰地の多い集落ではなく、タコウノヤマという大きな中核空間を頂点にすえた信仰地のある集落へと組織化される。

これらを空間概念図とすると、タコウノヤマを貫く尾根線が集落間の境界の役割を果たしており、生業空間は新井分岐点かつオサバイ様がおかれ、尾根線上にタコウノヤマがおかれていることがわかる。

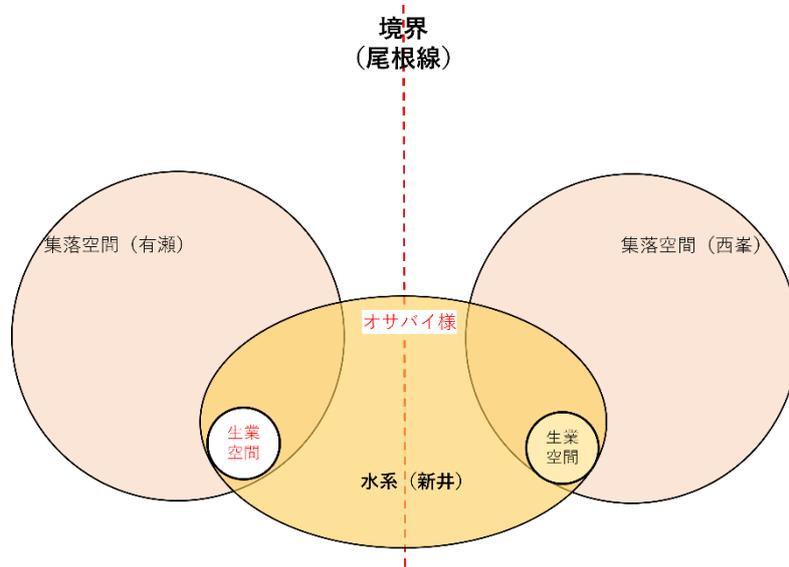


図 4-20 空間概念図 (オサバイ様)

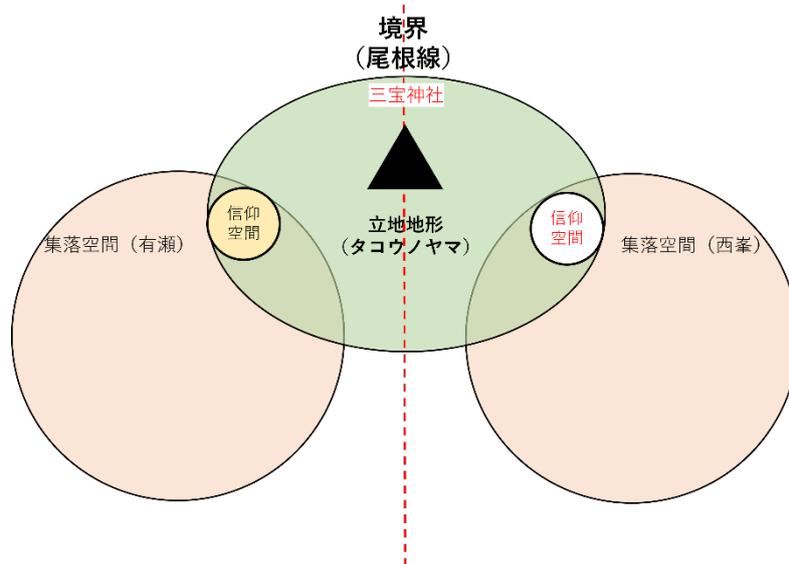


図 4-21 空間概念図 (三宝神社)

・有瀬、西峯の空間的特質

有瀬、西峯の空間的特質について、共有のありようとして、他者が1つの共同体として1つの山地地形で共に生きるためには、立地地形を手掛かりとした境界の決定、さらにその境界は分断するために設けるわけではなく、境界で異なるもの同士が共に生きるよう共通の信仰を持つことである。これは集落を超える枠組みとして尾根線上にあり、集落間の境界に位置している三宝神社や、一つの水路の共有として尾根線の分岐点となる場所を境界とし、そばにオサバイ様をおくなどのありようからいえる。

またそれを踏まえて個別のありようとして1つの集落単位で共同体をもつには、核となる空間に対して離れていてもその空間とかかわりを持つ（知覚させる）ように人為的空間をつくるのが、1つの山地地形に2つの集落が並存している空間のありようである。これは有瀬の特質として有瀬川を核とした合理的水路体系がある際に有瀬川から離れた新井沿いの居住地が有瀬川の谷に向かって母屋を向けていることや、地形が異なる下有瀬に本田井を尾根線を越えてつなげることなどからわかる。西峯についても西峯氏を祀る八幡宮の軸や尾根線上にある信仰地がタコウノヤマを望んでいることからあきらかである。

これらを空間概念図として記すと、有瀬、西峯集落は異なる空間の核を持ち、個別の集落空間を構成していること、また、1つの山地地形に並存していることで、集落の境界は尾根線で決められ、共有空間はその境界上におかれる。これこそが有瀬、西峯集落の空間的特質であり、この研究の成果である。

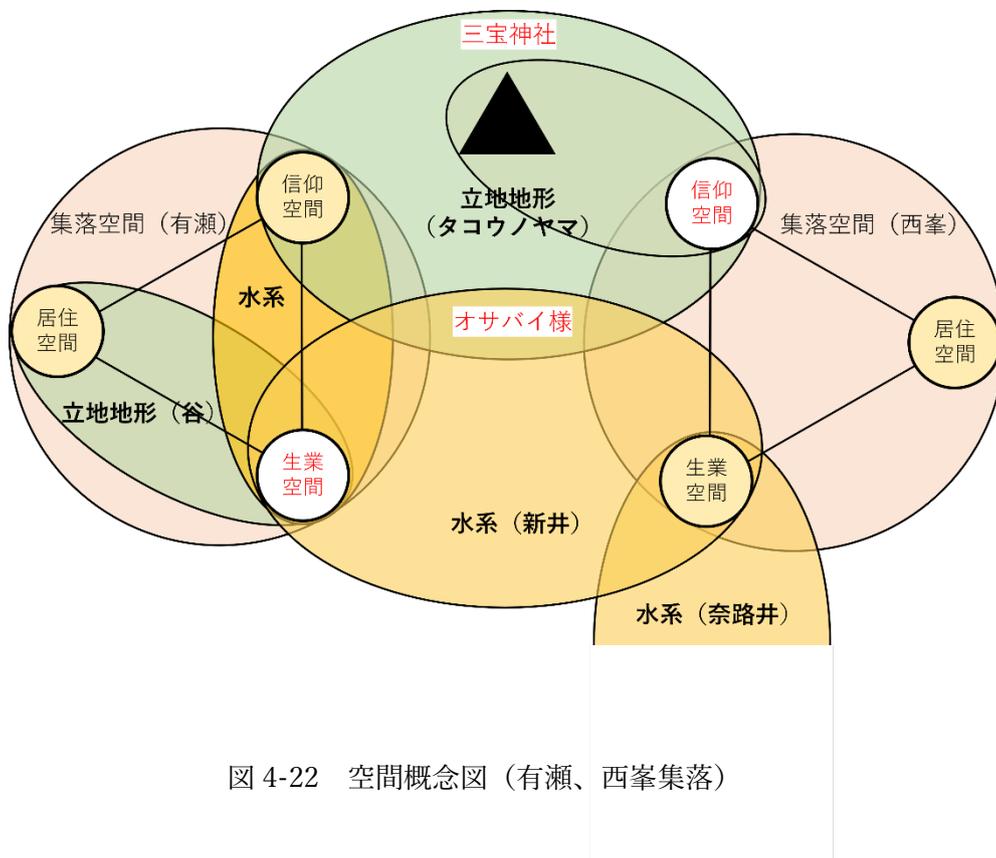


図 4-22 空間概念図 (有瀬、西峯集落)

終章

5-1 研究の成果

本研究では、有瀬、西峯集落の空間的特質を明らかにすることで、1つの山地地形で並存して共に生きる集落空間のありようを把握することができた。他者が1つの共同体として、1つの山地地形で共に生きるためには、立地地形を手掛かりとした境界の決定、さらに境界を含めて異なるもの同士が共に生きるよう共通の信仰を持つことが重要である。これは集落を超える枠組みとして尾根線上にあり、集落間の境界に位置している三宝神社や、1つの水路の共有として尾根線の分岐点となる場所を境界とし、かつ周辺を信仰地に行っているオサバイ様のありようからいえることである。

また、それを踏まえて個別の在り様として1つの集落単位で共同体を持つには、核となる空間に対して離れていても、その空間を知覚し、かかわりを持つような人為的空間をつくることが重要であり、これが1つの山地地形に2つの集落が並存している空間のありようであると考えられる。例として有瀬の特質である有瀬川を核として合理的な水路体系がある空間に対して、谷から離れた居住地でも谷に向かって母屋を向けていることや、地形が異なる下有瀬には谷からの水路を尾根を越えてまでつなげることからうかがえる。西峯についても西峯氏を祀る八幡宮や尾根線上にある信仰地がタコウノヤマを望んでいることからあきらかである。

5-2 研究の課題

本研究では有瀬、西峯集落の空間的特質を明らかにすることで、1つの山地地形で並存して共に生きる集落のありようを 共有性、個別性という言葉に着目して明らかにした。しかしここでいう共有性、個別性は対象とした2集落について比較することで決めているものであり、これが一般的な山地地形に並存する集落における共有性、個別性であるとは言い難い。似た条件の集落を同じ手法で行うことや、物部川流域圏の集落という枠組みで同じ流域圏の集落と比較することで、より山地地形で並存する集落という条件に対しての集落のありように迫ることができると考えている。

謝辞

本研究をまとめるにあたり、指導をしてくださった渡辺准教授、赤塚准教授、西内准教授には心より感謝申し上げます、

渡辺准教授には、自身の「人は場所に対してどう生きているのか」ということから始まったこの研究について、基本的な調査研究の方法や記録について教えていただいたほか、幾度も現地調査に同行していただき、集落のありようを共に考えてくださるなど、多大な助言、お時間を割いてくださったおかげで最終的に概念図として2集落のありようを明示することができました。改めて感謝申し上げます。

また、突然の訪問にも関わらず集落について丁寧に教えてくださった有瀬、西峯集落の方々に深く感謝を申し上げます。過去の空間のありようを現在の空間から読み解くのは困難を極める中、この地で生きてきた方から歴史や文化についてお話をかえたことをかけがえのないものと受け止め、研究として後世に残します。

本研究を進めるにあたり、同行や多くの助言をいただいた研究室のメンバーに心より感謝を申し上げます。また、6年間にわたる大学生活を温かく見守り、支えてくださった家族に心より感謝申し上げます。

最後に、西峯集落の農地として取り上げた「天空の菜の花畑」は、有瀬集落の領域にある農地に、場所に対する空間構成に秀でている西峯集落の方が菜の花を植えることで生まれた、新たな価値のある空間です。特質の異なる他者同士が独立して生きるでもなく、片方に依存するわけでもない、並存することで生まれるありようをこの2集落から感じました。現代の多様な生業が行われている状況の中、この研究が、将来の居住空間への手掛かりになり、地球に生きる人が共に生きていけることを願います。

主要参考文献

- 山本大監修（1979）「日本歴史地名体系-高知県の地名-」平凡社
- 矢嶋仁吉（1956）「集落地理学」古今書院
- 齊木崇人（1986）「集落空間の構成原理と地形立地」農村計画学会誌
- 日本建築学会編（1989）「図説集落-その空間と計画-」都市文化社
- 香北町（1968）「香北町史」香北町教育委員会
- 香北町編集委員会編集（1995）「写真集ふるさと今・昔 香北町」
- 香北お寺・神社・お堂めぐり（URL: <http://hanasakiyama.web.fc2.com/odou/>）
- 国土交通省国土地理院（URL: <https://www.gsi.go.jp/top.html>）
- ゼンリン住宅地図（2008）「高知県香美市」
- 国土交通省国土地理院「明治40年測図和食5万地形図」